

北海道大学一般選抜(前期日程・後期日程)及び私費外国人留学生(学部)
入試の実施と合格者の発表

北海道大学国際戦略2040キックオフシンポジウムをYouTube Liveで開催





災害等危機対策本部設置訓練の実施

研究者のためのスキルアップセミナー⑮
資料作りに役立つ「伝わるデザインとレイアウト」を開催

全学ニュース

- 1 北海道大学一般選抜（前期日程・後期日程）及び私費外国人留学生（学部）入試の実施と合格者の発表
- 4 災害用無線機設置・通信訓練の実施
- 5 災害等危機対策本部設置訓練の実施
- 6 第10回 定例記者会見を開催
- 7 「国民との科学・技術対話」支援事業 アカデミックファンタジスタ 先端生命科学研究院 芳賀 永教授が札幌北高校にて講義を実施
- 8 研究者のためのスキルアップセミナー⑮ 資料作りに役立つ「伝わるデザインとレイアウト」を開催
- 9 北大フロンティア基金
- 11 「総長表彰」表彰式を挙行
- 12 北海道大学DX博士人材フェローシップ生向け確定申告セミナーを開催
- 13 北海道大学国際戦略2040キックオフシンポジウムをYouTube Liveで開催
- 14 令和3年度大学の世界展開力強化事業（ロシア）事業総括報告会を開催
- 15 第9回北海道大学オープンファシリティシンポジウムをオンラインで開催
- 16 nano tech 2022に研究シーズを多数出展
- 17 「北海道大学オリジナルティー製作プロジェクト」が新たな北大ブランド認定商品を開発
- 18 国際連携研究教育局（GI-CoRE）先住民・文化的多様性研究グローバルステーション（GSI）がキックオフシンポジウムを開催
- 19 北海道ダイバーシティ研究環境推進ネットワークシンポジウムを開催

部局ニュース

- 20 先端生命科学研究院でFDSD研修会「総会2021」を開催
- 20 令和4年度薬学実務実習開始セレモニーを挙行
- 21 国際広報メディア・観光学院が教育・研究交流「TLLPスタディセッション」を開催
- 22 令和3年度北海道大学北方生物圏フィールド科学センター耕地圏・水圏ステーション技術職員専門研修を開催

定年を迎えるにあたって 23

諸会議の開催状況 57

学内規定 58

表敬訪問 58

人事 59

訃報

- 60 名誉教授 杉村 宏 氏
60 名誉教授 岡澤 養三 氏



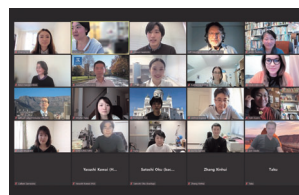
北海道大学DX博士人材フェローシップ生向け確定申告セミナーを開催



「北海道大学オリジナルティー製作プロジェクト」により新たな北大ブランド認定商品を開発



令和4年度薬学実務実習開始セレモニーを挙行



国際広報メディア・観光学院が教育・研究交流「TLLPスタディセッション」を開催

表紙：北海道大学国際戦略2040キックオフシンポジウムをYouTube Liveで開催（関連記事13頁に記載）

裏表紙：キャンパス風景② 第一体育館・第二体育館（北17条西17丁目）

■全学ニュース

北海道大学一般選抜（前期日程・後期日程）及び私費外国人留学生（学部）入試の実施と合格者の発表

令和4年度一般選抜の前期日程試験は2月25日（金）・26日（土）に、後期日程試験は3月12日（土）に実施しました。また、私費外国人留学生（学部）入試第2次選考は2月18日（金）に実施しました。各試験の実施状況等は、次のとおりです。

1. 前期日程

志願者5,409名について、2段階選抜の第1段階選抜を行いました。その結果、志願者全員が合格し、個別学力検査等の受験対象者は5,409名で、受験者は5,238名でした。

合格者は1,999名で、合格発表は、3月8日（火）午前9時に本学ホームページに掲載しました。

なお、合格者の出身高校別では、道内高等学校出身者が712名で全体の35.6%。卒業年度別では、令和4年3月高等学校卒業者が1,448名で全体の72.4%。また、男女別では女子が593名で全体の29.7%でした。

2. 後期日程

志願者4,107名について、2段階選抜の第1段階選抜を行いました。その結果、志願者全員が合格し、個別学力検査等の受験対象となった者は4,107名で、受験者は1,682名でした。

合格者は532名で、合格発表は、3月22日（火）午後16時に本学ホームページに掲載しました。

なお、合格者の出身高校別では、道内高等学校出身者が83名で全体の15.6%。卒業年度別では、令和4年3月高等学校卒業者が381名で全体の71.6%。また、男女別では女子が119名で全体の22.4%でした。

また、前期及び後期日程試験を新型コロナウイルス感染症への罹患等より欠席した志願者14名に対し、3月22日（火）に追試験を行い、合格発表は3月26日（土）午前9時に本学ホームページに掲載しました。

3. 私費外国人留学生（学部）入試

私費外国人留学生（学部）入試の志願者は151名で、第1次選考の合格者は51名、第2次選考の受験者は37名、合格者は21名でした。

（学務部入試課）

令和4年度一般選抜（前期日程）合格者数等一覧

学部・学科等			募集人員	受験対象者	欠席者	受験者	倍率	合格者	
総合入試	文系		95	349 (114)	6 (0)	343 (114)	3.6	104 (31)	
	理系	数学重点選抜群	125	410 (57)	9 (1)	401 (56)	3.2	129 (15)	
		物理重点選抜群	225	591 (71)	15 (4)	576 (67)	2.6	230 (28)	
		化学重点選抜群	226	605 (139)	14 (5)	591 (134)	2.6	235 (42)	
		生物重点選抜群	169	444 (201)	10 (6)	434 (195)	2.6	173 (76)	
		総合科学選抜群	239	691 (195)	24 (8)	667 (187)	2.8	246 (63)	
	文学部		118	367 (174)	8 (2)	359 (172)	3.0	121 (49)	
教育学部		20	56 (33)	1 (0)	55 (33)	2.8	19 (13)		
法学部		140	321 (96)	8 (3)	313 (93)	2.2	145 (40)		
経済学部		140	350 (79)	9 (3)	341 (76)	2.4	145 (33)		
学部別入試	医学部	医学科	92	315 (78)	15 (5)	300 (73)	3.3	97 (22)	
		保健学科	看護学専攻	60	132 (116)	7 (6)	125 (110)	2.1	66 (61)
			放射線技術科学専攻	28	73 (29)	5 (4)	68 (25)	2.4	35 (16)
			検査技術科学専攻	25	65 (44)	0 (0)	65 (44)	2.6	36 (25)
			理学療法学専攻	13	47 (21)	2 (1)	45 (20)	3.5	18 (9)
			作業療法学専攻	10	30 (16)	2 (1)	28 (15)	2.8	18 (12)
		歯学部	38	144 (57)	16 (6)	128 (51)	3.4	42 (19)	
	獣医学部		20	90 (51)	6 (3)	84 (48)	4.2	22 (11)	
	水産学部		105	329 (80)	14 (4)	315 (76)	3.0	118 (28)	
	計		1,888	5,409 (1,651)	171 (62)	5,238 (1,589)	2.8	1,999 (593)	

※（ ）内の数字は女子で内数

令和4年度一般選抜（後期日程）合格者数等一覧

学部・学科等		募集人員	受験対象者	欠席者	受験者	倍率	合格者	
学部別入試	文学部	37	306 (114)	185 (78)	121 (36)	3.3	49 (13)	
	教育学部	10	97 (39)	55 (25)	42 (14)	4.2	12 (2)	
	法学部	40	351 (104)	212 (56)	139 (48)	3.5	48 (10)	
	経済学部	20	315 (53)	213 (33)	102 (20)	5.1	25 (4)	
	理学部	数学科	10	105 (7)	61 (6)	44 (1)	4.4	10 (0)
		物理学科	3	81 (5)	42 (3)	39 (2)	13.0	8 (0)
		化学科	20	156 (25)	90 (13)	66 (12)	3.3	22 (8)
		生物科学科 生物学専修分野	10	108 (36)	57 (17)	51 (19)	5.1	11 (2)
		生物科学科 高分子機能学専修分野	2	18 (8)	9 (5)	9 (3)	4.5	2 (1)
		地球惑星科学科	5	70 (17)	41 (9)	29 (8)	5.8	6 (1)
	薬学部	24	336 (135)	190 (75)	146 (60)	6.1	32 (12)	
	工学部	応用理工系学科	29	296 (29)	186 (20)	110 (9)	3.8	40 (2)
		情報エレクトロニクス学科	38	280 (18)	167 (4)	113 (14)	3.0	43 (1)
		機械知能工学科	25	331 (30)	217 (16)	114 (14)	4.6	28 (3)
		環境社会工学科	47	378 (91)	218 (47)	160 (44)	3.4	59 (17)
	農学部	53	378 (116)	226 (67)	152 (49)	2.9	62 (22)	
	獣医学部	15	114 (60)	47 (21)	67 (39)	4.5	14 (8)	
	水産学部	50	387 (85)	209 (49)	178 (36)	3.6	61 (13)	
	計		438	4,107 (972)	2,425 (544)	1,682 (428)	3.8	532 (119)

※（ ）内の数字は女子で内数

令和4年度私費外国人留学生（学部）入試合格者数等一覧

学部・学科等

学部・学科・専攻・コース等		志 願 者		第1次選考合格者		第2次選考受験者		合 格 者	
文学部	人文科学科	13	(5)	1	(0)	1	(0)	1	(0)
教育学部	教育学科	3	(2)	3	(2)	3	(2)	2	(2)
法学部	法学課程	11	(6)	3	(3)	3	(3)	1	(1)
経済学部	経済学科	8	(0)	2	(0)	1	(0)	1	(0)
	経営学科	6	(1)	1	(0)	1	(0)	0	(0)
理学部	数学科	3	(1)	3	(1)	3	(1)	1	(0)
	物理学科	3	(0)	2	(0)	2	(0)	2	(0)
	化学科	—	—	—	—	—	—	—	—
	生物科学科	8	(4)	0	(0)	—	—	—	—
	（生物学専攻分野）	5	(3)	0	(0)	—	—	—	—
	（高分子機能学専攻分野）	3	(1)	0	(0)	—	—	—	—
	地球惑星科学科	1	(0)	1	(0)	1	(0)	1	(0)
医学部	医学科	1	(0)	0	(0)	—	—	—	—
	保健学科	4	(3)	1	(0)	1	(0)	1	(0)
	看護学専攻	—	—	—	—	—	—	—	—
	放射線技術科学専攻	2	(2)	0	(0)	—	—	—	—
	検査技術科学専攻	2	(1)	1	(0)	1	(0)	1	(0)
	理学療法学専攻	—	—	—	—	—	—	—	—
	作業療法学専攻	—	—	—	—	—	—	—	—
歯学部	歯学科	1	(0)	0	(0)	—	—	—	—
薬学部	薬科学科	2	(2)	1	(1)	1	(1)	1	(1)
	薬学科	1	(0)	0	(0)	—	—	—	—
工学部	応用理工学科	10	(5)	5	(2)	3	(1)	1	(1)
	応用物理学コース	2	(1)	1	(1)	0	(0)	—	—
	応用化学コース	6	(4)	2	(1)	2	(1)	1	(1)
	応用マテリアル工学コース	2	(0)	2	(0)	1	(0)	0	(0)
	情報エレクトロニクス学科	34	(10)	8	(1)	4	(0)	2	(0)
	情報理工学コース	15	(3)	3	(1)	1	(0)	1	(0)
	電気電子工学コース	10	(4)	2	(0)	1	(0)	1	(0)
	生体情報コース	3	(2)	1	(0)	0	(0)	—	—
	メディアネットワークコース	4	(0)	2	(0)	2	(0)	0	(0)
	電気制御システムコース	2	(1)	0	(0)	—	—	—	—
	機械知能工学科	11	(1)	2	(1)	1	(0)	1	(0)
	機械情報コース	5	(0)	0	(0)	—	—	—	—
	機械システムコース	6	(1)	2	(1)	1	(0)	1	(0)
	環境社会工学科	10	(5)	7	(3)	2	(2)	1	(1)
	社会基盤学コース	—	—	—	—	—	—	—	—
	国土政策学コース	—	—	—	—	—	—	—	—
	建築都市コース	4	(2)	2	(1)	1	(1)	1	(1)
	環境工学コース	4	(2)	4	(2)	1	(1)	0	(0)
	資源循環システムコース	2	(1)	1	(0)	0	(0)	—	—
農学部	生物資源科学科	3	(3)	0	(0)	—	—	—	—
	応用生命科学科	6	(1)	1	(0)	1	(0)	0	(0)
	生物機能化学科	3	(1)	1	(1)	1	(1)	0	(0)
	森林科学科	—	—	—	—	—	—	—	—
	畜産科学科	—	—	—	—	—	—	—	—
	生物環境工学科	—	—	—	—	—	—	—	—
	農業経済学科	—	—	—	—	—	—	—	—
獣医学部	共同獣医学課程	4	(3)	4	(3)	3	(2)	0	(0)
水産学部	海洋生物科学科	5	(2)	5	(2)	5	(2)	5	(2)
	海洋資源科学科								
	増殖生命科学科								
	資源機能化学科								
合 計		151	(55)	51	(20)	37	(15)	21	(8)

※（ ）内の数字は女子で内数

国・地域別

国・地域	志 願 者		第1次選考合格者		第2次選考受験者		合 格 者	
中国（香港を含む）	100	(42)	41	(20)	29	(15)	16	(8)
韓国	47	(12)	10	(0)	8	(0)	5	(0)
台湾	2	(1)	0	(0)	—	—	—	—
インドネシア	1	(0)	0	(0)	—	—	—	—
シンガポール	1	(0)	0	(0)	—	—	—	—
合 計	151	(55)	51	(20)	37	(15)	21	(8)

※（ ）内の数字は女子で内数

災害用無線機設置・通信訓練の実施

1月21日（金）、札幌キャンパスの6拠点（本部及び支部5拠点）において、災害用無線機設置・通信訓練を実施しました。

本学では、北海道胆振東部地震での経験を踏まえ、災害発生時における情報収集手段を確保するため、札幌キャンパス内6拠点に災害用無線機を設置しています。

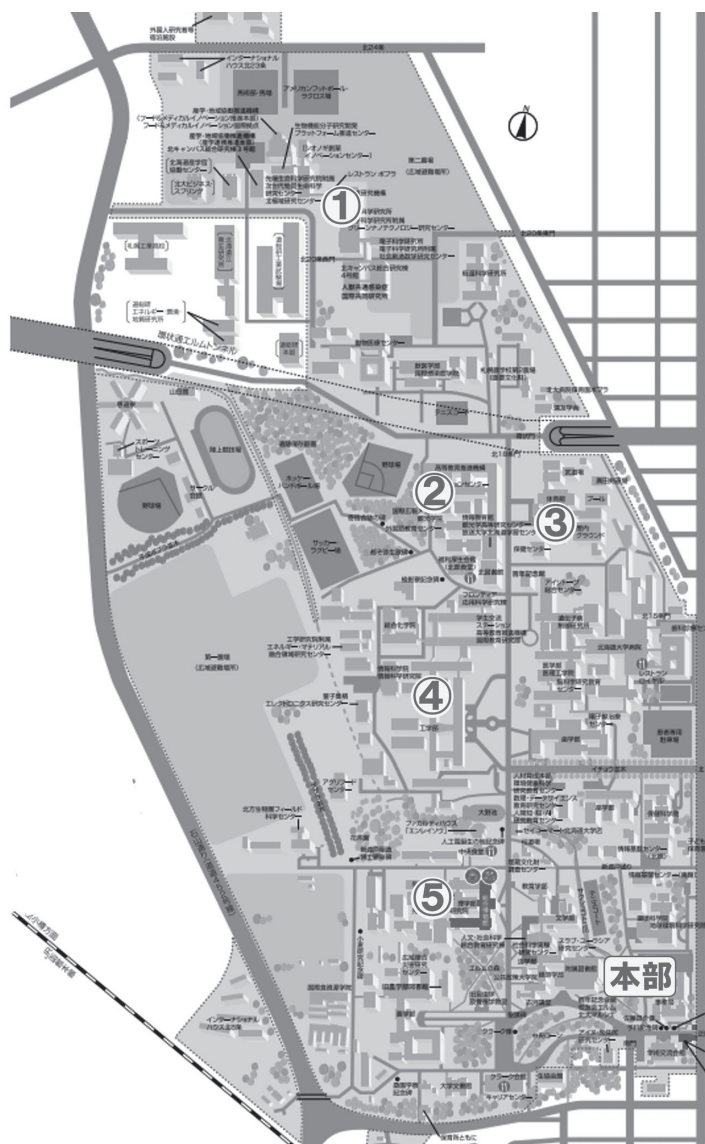
本訓練は、平時から災害用無線機の使用を認識し、設置・通信方法を実践形式で体験しておくことで、災害発生時でも確実かつ迅速に対応することを目的として実施しました。

当日は、26名の事務職員等が参加し、無線機配備場所となっている部局等ごとに、令和元年度に策定した「北海道大学災害対策用簡易無線機マニュアル」に基づき、無線機及び可搬式アンテナを設置する「①設置訓練」、また、実際に無線機端末を操作し本部とのテスト通信を行う「②通信訓練」を行いました。一時、「②通信訓練」において、無線機の操作方法が原因で通信が滞る場面がありましたが、最終的には参加した全員が無線機による通信を体験し、災害発生時の対応力向上を図ることができました。

実施後のアンケートでは、回答者全員が、訓練を通じた模擬体験により、災害発生時における無線機設置及び通信イメージが「高まった」若しくは「非常に高まった」と回答する結果となりました。

いざという時に災害用無線機を有効活用できるよう、来年度以降も、訓練内容の改善を図りながら、定期的に訓練を実施していく予定です。

（総務企画部総務課）



左図：災害用無線機配備場所

本部 事務局

支部 以下5拠点

- ① 北キャンパス
- ② 高等教育推進機構
- ③ 体育館
- ④ 工学部
- ⑤ 理学部

災害等危機対策本部設置訓練の実施

2月4日（金）、事務局において、災害等危機対策本部設置訓練を実施しました。

本学では、災害発生時に学内の情報収集や意思決定を行うことを目的とし、事務局大会議室に災害等危機対策本部を設置することとしています。

本訓練は、災害発生時に迅速に本部を立ち上げるための知識を身に付けること、及び災害用電話機やパソコン等の作動及び通信の確認を目的とし実施しました。

当日は、運営スタッフも含め事務局職員等18名が参加し、①平時における

大会議室のレイアウトから、災害等危機対策本部のレイアウトへの変更、②電話回線等の切り替え及びネットワーク環境の構築、並びに③電話回線及びネットワークの通信確認を行いました。訓練後には、リスク管理統括責任者である村田善則理事より、挨拶及び講評をいただきました。

実施後のアンケートでは、回答した11名全員が、訓練を通じた模擬体験により、本部設置のイメージや災害発生時の問題意識が「高まった」もしくは「非常に高まった」と回答する結果となりました。一方で、「マニュアル等

の改善により、より円滑に本部設置作業を行えるのではないか」といった意見も寄せられました。

今後は、訓練で得られた課題等を踏まえ、マニュアル等の見直しを図る予定です。また、昨年度に続き、今回も新型コロナウイルス感染拡大防止のため、必要最低限の人数での実施となりましたが、参加していない職員も含め、本部設置等、災害時の対応にかかる知識を身に付けられるような取り組みも検討していく予定です。

（総務企画部総務課）



訓練中の様子



訓練後の村田理事からの挨拶及び講評の様子

第10回 定例記者会見を開催

2月17日（木）、本学の特色ある教育研究活動や運営状況等を社会に向けてわかりやすく発信することを目的とした「定例記者会見」をオンライン形

式で開催しました。吉見 宏理事・副学長（広報室長）の進行のもと、西邑隆徳農学研究院長が発表し、北海道教育庁記者クラブ加盟社等から6名の参

加がありました。発表内容は以下の通りです。

（総務企画部広報課）

発表事項（発表者）

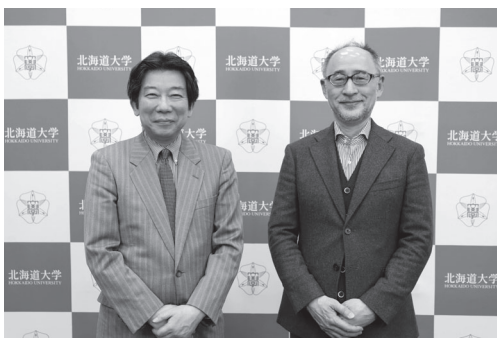
- ・エルムの森プロジェクト 歴史的建物を、未来へ
～北大キャンパス内の歴史的建造物を教育・研究の場として有効活用～
農学研究院長 西邑 隆徳



定例記者会見配信会場



発表を行う西邑研究院長



当日の発表者と吉見理事・副学長
（左から吉見理事・副学長、西邑研究院長）



Zoomを用いた発表の様子

「国民との科学・技術対話」支援事業 アカデミックファンタジスタ 先端生命科学研究院 芳賀 永教授が札幌北高校にて講義を実施

「がん細胞の動きを止めろ！」 先端生命科学研究院 芳賀 永 教授

細胞生物学が専門の芳賀教授。がんの転移を防ぐには、腫瘍が留まるべき境界を越えて集団で他の組織にまで染み出す「集団浸潤」と呼ばれる現象が鍵になるのではないかと考え、実験を続けています。

芳賀教授は細胞の基礎知識から発がんサイクルまでをクイズを織り交ぜながら丁寧に解説した後、薬液を使って集団浸潤を阻止する実験について映像を用いながら紹介しました。生徒からは「こんなに詳しくがんについて聞けた

のは初めてで面白かったです」といった声が聞かれ、講義終了後個別に質問にくる生徒も見られるなど、積極的に参加する姿が伺えました。



放課後にもかかわらず多くの生徒が参加



生徒からの個別質問に答える芳賀教授

日 時：2022年1月24日（月）15：50－17：30

会 場：北海道札幌北高等学校

参加生徒：1－2年生 39名

アカデミックファンタジスタとは？

本学の第一線の研究者が、出張講義やオンライン講義などを通じて高校生に研究を伝える「アカデミックファンタジスタ（Academic Fantasista）」。

今年度はコロナ対策を十分に行って、札幌近郊の高校等を対象に17名の教員が講義を実施しています。

当事業は、内閣府が推進する「国民との科学・技術対話」の一環として、北海道新聞社の協力のもと、平成24年度より実施しています。

研究広報特設サイト「リサーチタイムズ」やFacebookでも講義レポート等を随時更新中です。こちらもぜひご

覧ください。

リサーチタイムズ

<https://www.hokudai.ac.jp/researchtimes/>

Facebook @Hokkaido.univ.taiwa

（総務企画部広報課）

研究者のためのスキルアップセミナー⑮ 資料作りに役立つ「伝わるデザインとレイアウト」を開催

2月2日（水）、オンラインにて「研究者のためのスキルアップセミナー⑮ 資料作りに役立つ『伝わるデザインとレイアウト』」を開催しました。

講師に高橋佑磨氏（千葉大学大学院理学研究院准教授）を迎え、教職員や学生など286名が参加しました。

「デザインやレイアウトを意識して

資料作成に取り組むことで、情報が正確に効率的に伝わると同時に、内容も洗練されていきます」と高橋氏は話し、資料に合わせたフォントの選び方や図の配置の仕方などを詳しく解説しました。参加者へのアンケートでは、「非常に勉強になりました。少しの工夫で資料が劇的に変わりそうです」と

いった声が聞かれました。

冒頭の挨拶は吉見 宏理事・副学長が、司会は創成研究機構の川本真奈美学術専門職が務めました。

（総務企画部広報課）

研究者のためのスキルアップセミナー⑮ 資料作りに役立つ『伝わるデザインとレイアウト』

日 時：令和4年2月2日（水）18時10分～19時30分

会 場：オンライン開催（Zoom）



講師の高橋氏



挨拶する吉見理事・副学長

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、期限を付さない、息の長い募金活動することとしています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金情報

基金累計額（1月31日現在）

32,565件 5,736,532,191円

1月のご寄附状況

法人等7社、個人131名の方々から7,286,507円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいている方々のご芳名、銘板の掲示について掲載させていただきます。（五十音別・敬称略）

寄附者ご芳名（法人等）

医療法人社団かなもり歯科医院、株式会社大歩、医療法人社団ひぐち耳鼻咽喉科、NPO法人北海道エコビレッジ推進プロジェクト、北海道ガス株式会社、株式会社誘喜

寄附者ご芳名（個人）

合川 正幸	青木 俊介	阿部 雅史	五十嵐秀也	石井 哲夫	井出 肇	猪股 路子	井原 博
今井 貴裕	今井 裕子	入澤 秀次	宇都正太郎	漆崎 要	縁記 和也	遠藤 公憲	大久保隆夫
大原 正範	奥田 英信	長田 義仁	小田原一史	方波見基雄	鹿取 正道	金川 眞行	河本 充司
菊地 英毅	岸 和弘	岸本 佳則	衣川 暢子	木村 祐介	倉内 宣明	小菅 充	小林 賢人
小林 真美	齊藤 和之	齊藤 晋	齋藤 久	坂本 大介	佐藤 克哉	佐藤貴美子	三升畑元基
三本木 嗣	志済 聡子	島垣 潤二	島田 茂	神保 重孝	菅原 新也	杉江 和男	鈴木 貴之
瀬名波栄潤	高岡 健仁	高津 哲也	高橋 修	高橋 正純	巽 聡子	田中 稔久	田中 宏明
玉澤 友基	津吉 智明	土家 琢磨	土屋 裕	寺澤 睦	戸田 純子	豊田 威信	中塚 英俊
鳴海 俊之	西田 実弘	西田 雄二	西野 一弥	西村 吾朗	野田 佳帆	花田 秀一	林 陽一
春名 敏弘	檜山かおり	福士 幸治	福永 悟郎	藤澤 裕子	前田 博	眞柄 泰基	政氏 伸夫
町田 貴裕	松尾 惟	松田 健一	松原 謙一	水庫 俊明	宮田 信幸	村上 泰一	村上 幸夫
村瀬徳啓充	矢嶋 剛	安井 一人	山形 剛	山口 良文	横山 考	吉田 亜紀	吉田 広志
渡邊 岳彰	渡辺明日香						

銘板の掲示（20万円以上のご寄附）

（個人）

五十嵐秀也、大久保隆夫、方波見基雄、島垣 潤二、眞柄 泰基

（法人）

株式会社大歩、NPO法人北海道エコビレッジ推進プロジェクト、株式会社誘喜

感謝状の贈呈



尾北 紀靖 様
※尾北真理様の感謝状も同時に贈呈させていただきました。
(令和4年2月2日)

ご寄附のお申し込み方法

北大フロンティア基金ホームページの「教職員の方によるご寄附について」にアクセスしてください。

<https://www.hokudai.ac.jp/fund/howto-staff.html>

①給与からの引き落とし

ホームページから「北大フロンティア基金申込書（兼・給与口座からの引落依頼書）」をダウンロードし、ご記入の上、卒業生・基金室基金事務担当に提出してください。

②郵便局または銀行への振り込み

卒業生・基金室基金事務担当にご連絡ください。払込取扱票をお送りします。

③現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、卒業生・基金室基金事務担当にご持参ください。

申込書は、ホームページから「北大フロンティア基金申込書（教職員現金用）」をダウンロードしてご記入いただくか、卒業生・基金室基金事務担当にもご用意していますので、お越しいただいてからご記入いただくことも可能です。

④クレジットカード決済・コンビニ決済でのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ

(<https://www.hokudai.ac.jp/cgi-bin/fund/bin/xRegist.cgi>) の寄附申し込みフォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 卒業生・基金室基金事務担当（事務局・学内電話 2017）
--

（総務企画部広報課）

「総長表彰」表彰式を挙行



寛金清博総長による挨拶

2月16日（水）、「教育研究総長表彰」「特別総長表彰」表彰式が関係者列席のもと、オンラインにより執り行われました。

教育研究総長表彰は、教育活動及び

研究活動を通し、特に優れた功績をあげた教員が、また、特別総長表彰は、大学拠点接種という極めて特殊な業務によって貢献があった組織が表彰されました。

なお、この度表彰を受けられた方々は、下記のとおりです。

（総務企画部人事課厚生労務室）

<教育研究総長表彰>

所 属	氏 名
法学研究科	尾 崎 一 郎
地球環境科学研究院	谷 本 陽 一
農学研究院	荒 木 仁 志
先端生命科学研究院	西 村 紳一郎
メディア・コミュニケーション研究院	中 川 理
工学研究院	北 島 正 章
獣医学研究院	石 塚 真由美

所 属	氏 名
文学研究院	池 田 透
文学研究院	佐々木 啓
文学研究院	菅 井 健 太
人獣共通感染症国際共同研究所	高 田 礼 人
北方生物圏フィールド科学センター	内 海 俊 介
高等教育推進機構	亀 野 淳

<特別総長表彰>

コロナワクチン接種推進タスクフォース

総務企画部総務課

北海道大学DX博士人材フェローシップ生向け確定申告セミナーを開催

2月21日（月）、北海道大学DX博士人材フェローシップ生向け確定申告セミナーを開催しました。

北海道大学DX博士人材フェローシップ制度は、本学が国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）の「次世代研究者挑戦的研究プログラム」に「Society5.0を牽引するDX博士人材育成のための研究支援プロジェクト」として採択されたことを受け、創設しました。選抜された優秀な博士課程学生に対して支給される研究奨励費（生活費相当額）は、雑所得として課税の対

象となるため、確定申告が必要です。

今回のセミナーは、田中将太郎公認会計士・税理士事務所代表の田中将太郎氏とディレクターの館越圭佑氏をお招きして、確定申告の概要及び確定申告に必要な知識等を実践形式で紹介していただきました。本制度の内容や特徴を組み入れたオリジナルの講演内容で、視聴学生から寄せられた多くの質問にも丁寧に回答をいただき、確定申告への理解を深めることができました。

当日のYouTubeライブ配信は日本

語で行いましたが、国税庁のホームページに設置されている、複数の言語に対応したマニュアルをスライド上で紹介するなど、留学生のニーズにも対応しています。

イベント等については、随時、以下のポータルサイト等でお知らせします。
ポータルサイト

<https://sites.google.com/eis.hokudai.ac.jp/dxphd-fellow/home>

（学務部学務企画課）

日 時：2022年2月21日（月）16：00～17：00

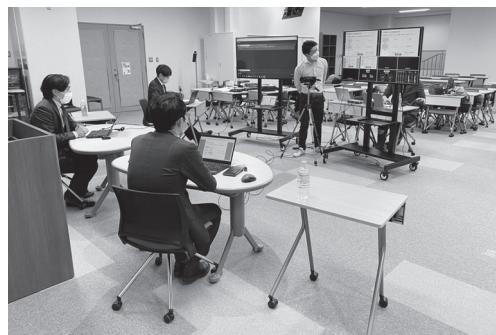
会 場：YouTubeライブ配信※

講演者：田中将太郎公認会計士・税理士事務所 代表 田中将太郎 氏
同事務所 ディレクター 館越 圭佑 氏

※確定申告期間中、オンデマンド配信をELMS上に掲載



セミナーの様子（左から館越氏、田中氏）



配信の様子



北海道大学DX博士人材フェローシップ生向け確定申告セミナー
（※ 確定公開）

YouTubeライブ配信画面



講師の館越氏（左）と田中氏（右）

北海道大学国際戦略2040キックオフシンポジウムをYouTube Liveで開催

2月17日（木）、北海道大学国際戦略2040キックオフシンポジウムをオンラインで開催しました。昨年12月に国際連携機構が策定した「2040年に向けた北海道大学の国際戦略」における2040年に目指すべき北海道大学の姿を実現するために、どのような方向性や取組が期待されているのかを、本戦略に関わる教職員及び学生とともに展望することを目的として、本会が開催されました。

第一部では、寶金清博総長から開会挨拶としてポストコロナにおける新たな国際戦略への期待が述べられました。続いて、横田 篤理事・副学長より「2040年に向けた北海道大学の国際

戦略」と題して、国際戦略の策定に至った背景から国際戦略の内容、特に大学全体の研究力向上に向けた外国人留学生受入れ促進について、事例やデータを用いてご講演いただきました。

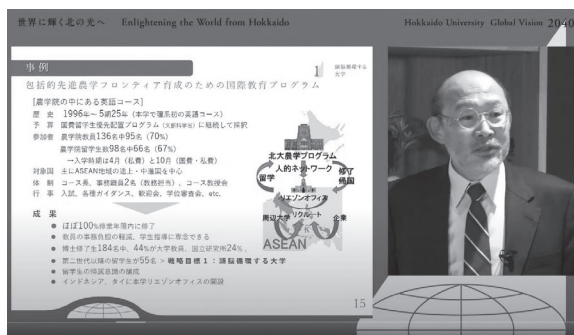
第二部では、高橋 彩国際連携機構副機構長の進行により、本学の卒業生である寶金総長、横田理事・副学長、インドネシアのIPB UniversityのChristofora Hanny Wijaya教授、公共政策大学院の池畑周直美准教授、在学生を代表して、公共政策大学院のFernando Ursine氏、農学部の本立真凜氏の6名によるトークセッションが行われました。

それぞれ海外での教育研究経験や学

生時代の思い出を交えた自己紹介の後に、国際戦略に関連付けて、本学を教育研究の場として選んだ理由、本学の強みや魅力、2040年の本学に期待することについて活発に意見が交わされました。

本シンポジウムでは、YouTubeのLiveを用いた真新しい配信方法により開催され、331名もの教職員及び学生にご参加いただきました。本シンポジウムの概要は、後日映像でまとめて公開する予定です。

（国際部国際企画課）



横田理事・副学長による講演



本学への期待を語るUrsine氏と本立氏



本学の人材の多様性を語る寶金総長



思い出の品を手に集合写真

令和3年度大学の世界展開力強化事業（ロシア）事業総括報告会を開催

2月2日（水）、令和3年度大学の世界展開力強化事業（ロシア）事業総括報告会を開催しました。文部科学省の平成29年度「大学の世界展開力強化事業～ロシア等との大学間交流形成支援～」の補助事業期間が令和3年度にて終了することから、本報告会は、5ヶ年度の事業成果を振り返るとともに、社会のニーズに根差した大学の日露人材育成の方向性を検討し、その推進のために有益となる情報やノウハウを共有することを目的として実施されました。なお、この活動は、本事業のプラットフォーム構築プログラム（タイプB）として本学と新潟大学が共同採択された、「日露経済協力・人的交流に資する人材育成プラットフォーム（HaRP）」事業の取組の一つです。

新型コロナウイルス感染症流行拡大の影響により、昨年度の活動状況報告会に引き続き今年度もオンラインでの開催となりましたが、日露交流を行う

国内の大学21機関から79名、文部科学省から4名、日露関係機関6機関から7名、自治体・企業等10機関から11名、計101名が本報告会に参加しました。

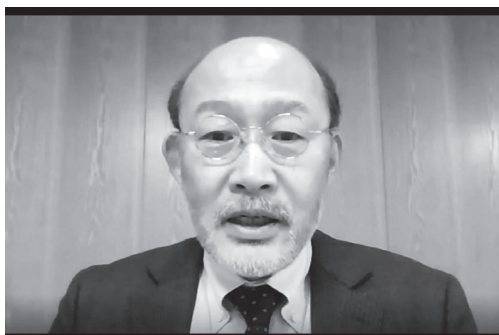
報告会の前半では、本学の横田 篤理事・副学長の開会挨拶、文部科学省の岸本織江高等教育国際戦略プロジェクトチームリーダーの来賓挨拶に続き、交流推進プログラム（タイプA）として採択された8大学（千葉大学、東京外国語大学、東京工業大学、金沢大学、長崎大学・福島県立医科大学、東海大学、近畿大学）による7事業の成果や補助事業終了後の展望についての発表が行われました。また、プラットフォーム構築プログラム（タイプB）として採択された本学・新潟大学より、補助事業期間終了後も引き続き維持するプラットフォーム機能についての説明が行われました。

報告会の後半では、東京外国語大学

による民間企業との協働インターンシッププログラムが紹介されるとともに、参加した学生・企業からプログラムへの参画を通じて得た成果について発表がありました。続いて本学から、日露人材育成プログラム自走化の事例紹介に加え、現在進行中の文部科学省委託事業「日本留学海外拠点連携推進事業」について発表を行い、キャリアパスも含めた外国人留学生への体系的支援や、大学を超えた同窓生のネットワーク構築といった長期的な人材育成の重要性に触れました。

総計で1,000名を超える日露間の学生交流を通じて各大学が培ったノウハウやネットワークを財産として、補助事業期間終了後も大学間で連携し各事業の継続に取り組んでいく意思を参画者間で共有し、報告会は盛況のうちに終了しました。

（国際部国際連携課）



開会挨拶をする横田理事・副学長



後半のモデレーターを務めた瀬戸口剛工学研究院長

第9回北海道大学オープンファシリティシンポジウムをオンラインで開催

第9回北海道大学オープンファシリティシンポジウムは、北海道大学創成研究機構グローバルファシリティセンター（以下 GFC）の1年間の取り組みの報告と令和2年度採択の先端研究基盤共用促進事業コアファシリティ構築支援プログラム「北大コアファシリティ構想」の事業経過報告、及び国が進める共用事業の最新情報の共有を目的として、1月21日（金）にGFC及び大学力強化推進本部の共催にてオンライン開催され、129名の参加申込に対し9割以上の方に実際にご参加いただきました。

本シンポジウムは、はじめに本学の増田隆夫理事・副学長による挨拶及びシンポジウムの趣旨説明があり、続いて文部科学省科学技術・学術政策局研究環境課研究基盤整備・利用係長の渡辺隆之氏により、『研究設備・機器の共用に関する政策について』と題して基調講演が行われ、国のこれまでの機器共用促進事業の取り組みと今後の方向性、本年度の大学等における研究設備・機器の共用化のためのガイドライン等の策定に関する報告が行われまし

た。

また、宇宙航空研究開発機構（以下 JAXA）宇宙科学研究所先端工作技術グループ長の中坪俊一氏より『宇宙科学研究所 先端工作技術グループの紹介とJAXAにおける技術系活躍と人材育成』と題して、JAXAの技術系職員のキャリアパスや人事考課、技術交流と人事交流等について報告が行われました。

続いてコアファシリティ構築支援プログラム事業経過報告として、GFC網塚 浩センター長と佐々木隆太副センター長より、機器共用機能強化プログラム及び研究支援人材育成プログラムに関する報告がなされました。

その後、GFC事業報告として、GFCオープンファシリティ部門の吉沢友和部門長、同機器分析受託部門／設備リユース部門の岡征子部門長、同試作ソリューション部門の中村晃輔部門長より各部門の1年間の主な活動及び今後の方向性に関して報告がなされました。

引き続き、GFC佐々木副センター長による進行のもと、パネルディスカッ

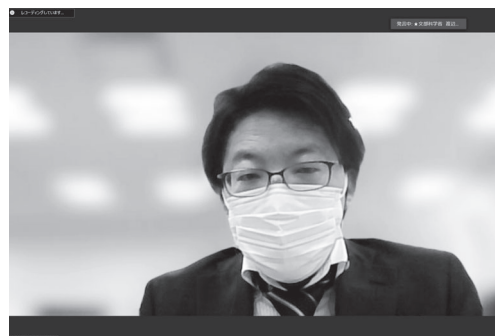
ションが行われました。パネリストには、渡辺氏、中坪氏に加え、情報基盤センターの棟朝雅晴センター長、大谷文章教授、五十嵐敏文副本部長を迎え、『コアファシリティに求められるDXとは』というテーマで討論が行われました。最後に、GFC網塚センター長による閉会の辞をもって閉会となりました。

本シンポジウムのアンケートの回答からは、特に北海道大学のコアファシリティ事業に関する報告について参加者から反響があったことがわかり、今後の各機関における取り組みの参考になったことと思われます。また、シンポジウム全体を通して、8割以上の方から、内容に『満足』、『まあ満足』との回答が得られました。本シンポジウムで今後取り上げてほしい内容や運営に関する意見なども多数寄せられ、GFCの今後の取り組みに対する期待、情報・課題の共有及び情報発信の重要性が伺えました。

（創成研究機構）



増田理事・副学長による開会の辞



文部科学省の渡辺係長による基調講演



JAXAの中坪グループ長による講演



パネルディスカッションの様子

nano tech 2022に研究シーズを多数出展

産学・地域協働推進機構は、1月26日（水）～28日（金）に東京ビッグサイトで開催されたnano tech 2022に出展しました。

nano tech 2022は、来場者の約半数がR&D（Research & Development）関係者です。研究開発に直接関わる方々へアピールすることができ、新規市場の開拓や新規事業のパートナー探しに最適な展示会の位置づけとなっております。

当機構のブースでは、9つのnano tech関連シーズを展示しました。

1. 「環状PEGによる金ナノ粒子の分散安定化法」工学研究院 応用化学部門 山本拓矢准教授
2. 「多孔体内部への無機物質の均一担持に向けた高効率気相プロセス」工学研究院 応用化学部門 岩

村振一郎助教

3. 「金属有機構造体を有する複合材料及びそれを用いたガス分離材」地球環境科学研究所 統合環境科学部門 野呂真一郎教授
4. 「規則性合金を用いた高効率触媒反応系の開拓」触媒科学研究所 触媒材料研究部門 古川森也准教授
5. 「自己規則化ナノ構造を利用した高耐久性滑液表面」工学研究院 応用化学部門 幅崎浩樹教授
6. 「中温領域で作動する直接アンモニア形水素膜燃料電池の開発」工学研究院 応用化学部門 青木芳尚准教授
7. 「Siフォトリソを用いたアナログRoF信号のMIMO処理デバイス」情報科学研究所 メディアネットワーク部門 佐藤孝憲准教授
8. 「カラー3次元流動空間測定シス

テム」工学研究院 機械・宇宙航空工学部門 村井祐一教授

9. 「超音波を用いた流動物性計測装置」工学研究院 機械・宇宙航空工学部門 田坂裕司准教授

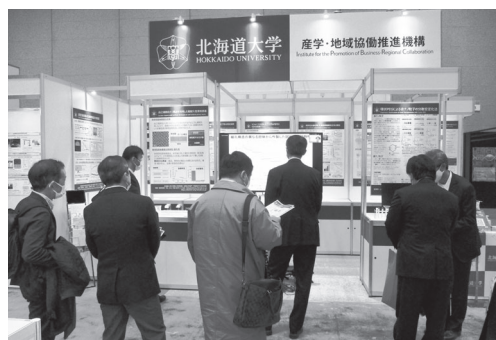
コロナ禍の影響で今年度の全来場者数は、10,607人とコロナ前の1/5程度でしたが、ブースでは研究代表者によるショートプレゼンテーション（リモート）やサンプルデモ展示を行い、約70名の方との名刺交換と共に共同研究等に関する具体的な相談を行いました。

産学・地域協働推進機構では、今後も民間企業等との様々なマッチングの企画を行いながら、産学連携活動を推進してまいります。

（産学・地域協働推進機構）



産学・地域協働推進機構ブースの様子



ショートプレゼンテーション（リモート）の様子

「北海道大学オリジナルティー製作プロジェクト」が新たな北大ブランド認定商品を開発

産学・地域協働推進機構では、北大ブランドの新たな取り組みとして「北海道大学オリジナルティー製作プロジェクト」を進めてきました。

このプロジェクトは、株式会社ルピシアが北海道ニセコ町に本社を移し、地域との連携を進めていたことから、北海道大学との連携を希望されたことがきっかけとなりました。株式会社ルピシアより学生とのコラボ商品を開発したいとの意向があり、学生に参加の募集をかけたところ、90名もの学生から応募があり、その中から20名の学生を選出しました。様々な学部・学年・出身地の学生が選出され、多様なメンバー構成となりました。

プロジェクト会議を進めて行く過程で、学生たちからは、各々がイメージする北海道大学について意見を出し合い、紅茶の味、フレーバー、トッピングなど様々な具体的アイディアについても議論しました。これらの意見を反映し、株式会社ルピシアの開発部よりノンフレーバードティーが2種、フレーバードティーが2種、パッケージ案3組が提示されました。

2月14日（月）、試飲・選定会を、寶金清博総長及び株式会社ベリッシモの城野祐司代表取締役社長参加のもと、実施しました。新型コロナウイルス対策のため、学生プロジェクトメンバーは別会場に集まり、2会場中継で

行われました。

株式会社ルピシアにて試作された紅茶（4種）、パッケージ（3組）を前に、参加者は悩みながらも、紅茶2種、パッケージ1組を決定しました。

本プロジェクトでは学生からの意見を取り入れながら進めてまいりました。これは北大ブランド認定商品の開発として初の試みです。今回開発した「北海道大学オリジナルティー」は3月の卒業式を目途にインフォメーションセンターエルムの森内のオリジナルショップで販売されます。ぜひ、お試しください。

（産学・地域協働推進機構）



学生プロジェクトメンバー

国際連携研究教育局（GI-CoRE）先住民・文化的多様性研究 グローバルステーション（GSI）がキックオフシンポジウムを開催

1月21日（金）と22日（土）の2日間で、令和3年度より活動を開始した先住民・文化的多様性研究グローバルステーション（GSI）のキックオフシンポジウムが開催されました。コロナ禍のためオンラインでの開催となりましたが、14カ国から36の大学を含む教育機関関係者他133名が参加しました。

1日目は寶金清博総長の歓迎挨拶、横田 篤理事・副学長の開会挨拶に続きGSIメンバーであるイギリスのオック

スフォード大学考古学研究所所長のクリス・ゴスデン教授が「コモنزのグローバルな歴史に向けて」、スウェーデンのルンド大学考古学部のピーター・ジョーダン教授が「人新世の時代におけるアイデンティティの考察：ヨーロッパの視点」と題し記念講演を行いました。

2日目はグローバルステーション長の加藤博文教授の開会挨拶に続き、GSIメンバーのアリゾナ大学人類学部のジョー・ワトキンス教授が記念講演

「先住民研究と人類学：将来の進路とパートナーシップ」を行いました。

両日とも記念講演の後にGSIの3つの研究ユニットメンバーによる各研究の紹介とGSIを通じた共同研究に関する議論が行われ、北海道大学をプラットフォームとした国際先住民研究と文化的多様性研究について活発な意見交換が行われました。

（国際連携研究教育局）



GSIキックオフシンポジウムの様子

北海道ダイバーシティ研究環境推進ネットワークシンポジウムを開催

2月4日（金）、本学をはじめとする北海道ダイバーシティ研究環境推進ネットワーク（通称KNIT：北海道大学、室蘭工業大学、帯広畜産大学、北見工業大学、株式会社アミノアップ、日東電工株式会社で構成）では、「多様性を武器にこれからの不確実な時代を生き抜くには～ステークホルダーからのメッセージ～」と題したダイバーシティ&インクルージョン（D&I）に関するオンラインシンポジウムを開催しました。

全国の大学・企業・研究機関等から130名程の参加があり、「ダイバーシティを推進したその先に、多様性を武器にしてどのように組織や個人が生き抜くのか？」という本シンポジウムのテーマへの関心の高さが伺えました。

本シンポジウムは、「新たな課題への解決策を見出すのは誰か？ 顕在化してこなかった課題を見出すのは誰か？」という課題背景のもと、ダイバーシティ研究環境を実現する上での重

要なステークホルダーと共に、D&Iの意義及び現状打破の手掛かりについて、参加者とともに学び、考えることを目的として開催しました。そこでステークホルダーとして、①D&Iを事業とする起業家②ミレニアル・Z世代を代表する若手人材③世界規模の課題解決に挑む企業④男性の生き方／生きづらさを研究する男性学が専門の研究者、である4名にご講演いただきました。

基調講演

「ダイバーシティのビジネスケースとグローバル新潮流」

株式会社カレイディスト 塚原月子氏

講演1

「米国ビジネススクールの実情にみる、ミレニアル・Z世代のD&I意識のリアルと企業・社会の変化に寄せる期待」

ダートマス大学タック経営大学院 坪田 駆氏

講演2

「エネルギー課題の解決に向け～JERAのダイバーシティ&インクルージョン～」
株式会社 JERAビジネスサポート&ソリューション本部 丸山昌子氏

講演3

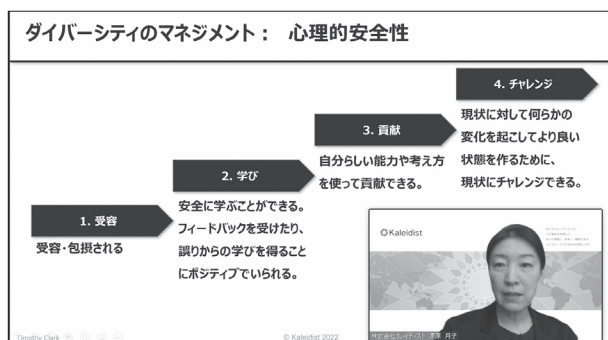
「男性学の視点から誰にとっても生きやすい社会を考える」
大正大学心理社会学部 田中俊之氏

本シンポジウムでは、講演者それぞれの立場からD&Iの推進や必要性について語っていただき、大変参考となる示唆が得られました。

北海道ダイバーシティ研究環境推進ネットワークの活動についてご興味のある方は、こちらのウェブサイトをご覧ください。

<https://knit.synfoster.hokudai.ac.jp>

（人材育成本部）



株式会社カレイディスト 塚原氏



ダートマス大学タック経営大学院 坪田氏



株式会社 JERAビジネスサポート&ソリューション本部 丸山氏



大正大学心理社会学部 田中氏

■ 部局ニュース

先端生命科学研究院でFDSD研修会「総会2021」を開催

先端生命科学研究院では2月14日（月）に、Zoomで令和3年度FDSD研修会「総会2021」を開催しました。今年度も教育・研究担当の全教員及び研究室の事務・技術職員、並びに理学・生命科学事務部職員を対象とし、同研究院の諸研究・教育活動報告とともに、新型コロナウイルス対策やコロナ禍で生じた業務改善などについて報告を実施しました（出席者総数93名（研究院等教職員62名、事務部31名））。

今年度のプログラムは3部構成で（1）desknet's NEO 概要紹介、（2）研究院・学院・学部の活動報告、（3）理学・生命科学事務部の活動紹介と質疑・応答が行われました。

プログラム（1）では、事務から今年度より全学での運用が開始されたグループウェア「desknet's NEO」の基

本的な機能と使用方法について、説明を頂きました。

プログラム（2）の研究推進関連では、研究院の概要、新型コロナウイルス感染症対策、部局URAの活動、産学連携強化と資金調達戦略、研究推進支援室の業務効率化、研究環境整備、次世代物質生命科学研究センターにおける活動について、門出健次研究院長、比能 洋教授から説明がありました。教育改革関連では、コロナ禍における講義・実習の充実とコミュニケーション環境整備、大学院進学に重点をおいた各種取り組み、博士後期課程進学率向上への取り組み、IGPの活動報告と国際広報について、黒川孝幸学科長、芳賀 永コース長、相沢智康教授から説明がありました。

プログラム（3）では、「理学・生

命科学事務部へ聞きたいこと！お答えします！」として、金川眞行事務部長からの理学・生命科学事務部概要説明と渡邊秀敏庶務担当係長から、教職員より寄せられた疑問・質問に対する回答をしていただきました。

今年度は、コロナ禍での業務遂行が2年目となり、オンラインツール等を使いこなしながら、教育や研究の質を向上させることが求められた難しい1年でした。2回目のオンライン開催となった総会は、教職員のコロナ禍に負けない前向きな姿勢をお互いに確認することができ、今後の改革につなげられる情報共有の場として有意義な時間となりました。

（生命科学院・先端生命科学研究院）

令和4年度薬学実務実習開始セレモニーを挙行

薬学部では、2月15日（火）に令和4年度薬学実務実習開始セレモニー「臨床現場へあがるための心得」をオンラインにて挙行了しました。

この式は、薬学科学生が実務実習（病院実習・薬局実習）に臨むにあたり毎年実施しているもので、学生は、実習中のユニフォームとなる真新しい上下の白衣に身を包み、引き締まった

面持ちで参加していました。

式には、木原章雄薬学部長、脇本敏幸教務委員長、実務実習担当教員らが出席し、実務実習の趣旨や学生に期待すること、今年度実施された実務実習をふまえての注意点などとともに、激励の言葉が伝えられました。

受入施設からは、北海道大学病院薬剤部の菅原 満薬剤部長、株式会社ア

インファーマシーズの若林奈美氏、株式会社ツルハの中村文哉氏、株式会社なの花北海道の井野千枝子氏が出席し、臨床の現場・患者さんに直接接する場で実習に臨む際の心構えなどが伝えられ、学生たちが神妙に聞き入る様子が見られました。

（薬学研究院・薬学部）



激励の言葉をかける菅原薬剤部長（右）

国際広報メディア・観光学院が教育・研究交流「TLLPスタディセッション」を開催

国際広報メディア・観光学院では、2月2日（水）と2月10日（木）に「タンデム・ランゲージ・ラーニング・プロジェクト（Tandem Language Learning Project：TLLP）・スタディセッション」を開催しました。

TLLPとは、国際広報メディア・観光学院、メディア・コミュニケーション研究院、シェフィールド大学（英国）、リーズ大学（英国）、ヘルシンキ大学（フィンランド）、メルボルン大学（オーストラリア）の間で行われてきた研究教育の交流プログラムです。

このプロジェクトの目的は、①学生・教員を含めた双方の研究交流及び研究ネットワークの構築、②研究遂行（データ収集、インタビュー、研究発表、研究討論）のために必要となるアカデミックな言語スキルの獲得にあります。具体的な教育プログラムの内容

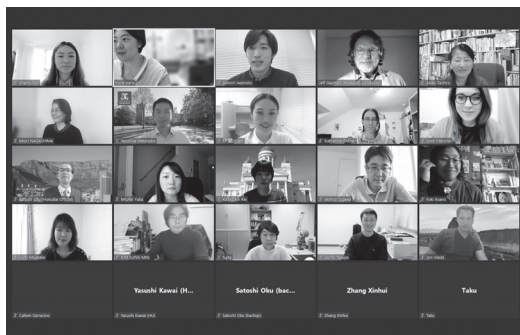
は、国際広報メディア・観光学院の学生と相手校の学生同士がペアを組み、互いに相手の研究のサポートをするタンデム・ラーニング、またその進展をウェブ上で支援する教員のアドバイス・システムが中心です。さらに、相互に相手の大学を訪問して研究発表や教育交流を行う「TLLPスタディセッション」を年に1～2回開催しています。

今年度2回目となるスタディセッションは、1回目（10月開催）に引き続きオンライン開催となりましたが、シェフィールド大学とメルボルン大学に加え、ビクトリア大学ウェリントン（ニュージーランド）とデュッセルドルフ大学（ドイツ）からの参加がありました。オンライン開催のメリットを生かして、4つの国を結び、2日間にわたって行われたスタディセッション

では、メルボルン大学の中根育子先生による講義や、計12名の大学院生による研究発表など、活発な研究・教育交流が行われました。TLLPの趣旨に基づき、本学の学生は英語で、相手校の学生は日本語で研究発表を行いました。数か月にわたり、発表要旨、パワーポイント、発表原稿などについてお互いの研究をネット上で研鑽してきた成果が、スタディセッションで発揮されました。

2014年以降開催されてきたTLLPスタディセッションも9年目を迎えました。今後も国際社会を舞台に活躍する研究者を育成することを目指し、海外諸大学とのより活発な教育・研究交流を続けていきます。

（国際広報メディア・観光学院、メディア・コミュニケーション研究院）



TLLPスタディセッション2日目の様子

令和3年度北海道大学北方生物圏フィールド科学センター 耕地圏・水圏ステーション技術職員専門研修を開催

北方生物圏フィールド科学センターでは、1月25日（火）に、本学及び道内外の各大学の技術職員を対象とした令和3年度北海道大学北方生物圏フィールド科学センター耕地圏・水圏ステーション技術職員専門研修（オンライン研修）を開催しました。本研修は教育研究支援業務に関する専門的知識と技術を広く習得することを目的に毎年開催しており、昨年に引き続きオンラインでの開催となりました。今年度は47名（うち、他大学からは、帯広畜産大学2名、神戸大学1名、京都大学7名、鳥取大学4名、筑波大学1名、九州大学2名、琉球大学2名）の参加がありました。

当日、午前の部では、はじめに、本学の獣医学研究院・迫田義博教授による「動物とヒトとウイルス」という演題で、感染症・ウイルス・細菌に関する総論や鳥インフルエンザウイルス等

についての講義を行いました。次に、エム・エス・ケー農業機械株式会社代表取締役社長・齊藤良幸氏による「拓く 支える 実りを 未来を」という演題で、国内外の農業に関する現状認識や脱炭素社会、持続可能な社会に向けてのこれからの取り組み等に関する講義を行いました。

午後の部では、「フィールド系技術業務に関する情報交換～各施設からの報告～」として、10施設（生物生産研究農場、植物園、静内研究牧場、水圏（生態系変動解析分野）、帯広畜産大学畜産フィールド科学センター、京都大学大学院農学研究科附属農場及び附属牧場、神戸大学大学院農学研究科附属食資源教育研究センター、鳥取大学乾燥地研究センター、琉球大学農学部附属亜熱帯フィールド科学教育センター）から報告がありました。今回初めての試みとして、報告を3つのセッシ

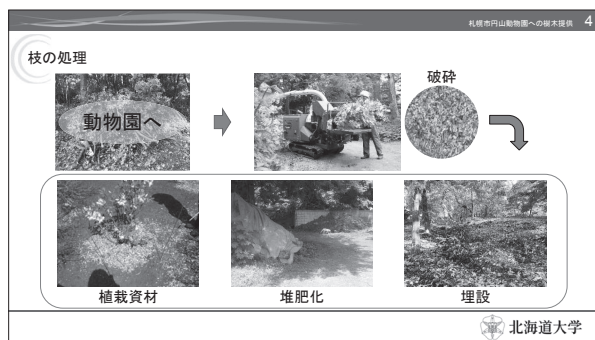
ョンに分け、途中にブレイクタイムを設けて発表者毎に数グループに分かれ（ZOOMのブレイクアウトルーム機能）、質疑応答や情報交換を行いました。受講者アンケートでは、ブレイクタイムによってより深い議論ができたという感想がありました。

オンラインでの開催に伴い、進行上のアクシデントはありましたが、オンラインだからこそ参加できた職員も多く、昨年よりも多くの他大学や施設の技術職員が参加して、大変貴重な研修となりました。参加者からの意見を踏まえ、引き続き今後の研修のあり方について模索していきたいと考えています。開催にあたりご指導・ご協力・ご講演いただいた関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

（北方生物圏フィールド科学センター）



鳥取大学の沖田総一郎氏の報告より



植物園の高谷文仁氏の報告より

■ 定年を迎えるにあたって

本年3月31日限りで定年を迎える方々のお言葉と略歴を紹介します。

法学研究科教授

よしだ くにひこ
吉田 邦彦 氏



長くとも短い35年でした。移籍時は、日本一の研究部があることへの憧れから参り、当時は、最強の民法学の拠点を作ろうと意欲に燃えていました。しかし一番のダメージを与えたのは、第1に、米とは異なる日本版ロースクール、そして第2に、債権法改正を皮切りに、（批判的・創造的な解釈学に打ち込んでいた恩師の時代とは隔絶した）註釈学派の席捲です。こうした中で独自の研究路線を維持した（できた）のは、「北大法の研究環境」のお陰と感謝しています。その他、2010年代半ばのグローバル大学指定を機縁に当大学の国際学術交流に尽力しようとしたのですが、コロナ禍で我が国は鎖国時代に再突入し、「海外出張」は白い目で見られることとなり、今昔の感があります。

民法学と同時に方法論的に「法的思考」とは何かについても考え続けました。結論めいたものとして、それは、「複眼的思考」に立てるかかどうか（つまり、相手方から物事を見る人権感覚です）、と思うに至っていますが、これについても全く相容れない「権威主義的な潮流」を身近に感ずるこの頃で、「同僚感覚」も様変わりです。しかし今後とも、このようなペイガン（pagan）的〔異教的〕な行き方（生き方）に共鳴してくれる後進が現れてくれることを秘かに願うのみです。

略 歴

生 年 月 日 昭和33年7月25日
昭和56年3月 東京大学法学部卒業
昭和56年4月 東京大学法学部助手
昭和59年10月 法政大学法学部助教授
昭和62年4月 北海道大学法学部助教授
平成8年2月 北海道大学法学部教授
平成8年11月 博士（法学）（東京大学）
平成12年4月 北海道大学大学院法学研究科教授

（この間、アメリカ合衆国ノースウェスタン大学ロースクール、スタンフォード大学ロースクール、ハーバード大学イェンチン研究所、マイアミ大学ロースクール、コロラド大学ロースクールで長期滞在（客員研究員、客員教授））

水産科学研究院教授

せき ひでし
関 秀司 氏



まずは、何をさておき、とても真面目な学生とは言えなかった私を根気強くご指導くださった先生方を始め、お世話になったすべての方々に感謝申し上げます。小学生の時にTVで観た「クストーの海底世界」の影響で北海道大学水産学部を目指し、北海道に移り来て45年、若い頃は有り余ると思った時間が振り返るとあっという間に過ぎていました。大学で学ぶうちに興味は海洋生物から化学工学へと移りましたが、研究目標は常に水産に関わるもので、幼い頃の憧れを違う形で叶えられたのではないかとと思っています。

教育・研究だけでなく、留学生専門教育教員や部活顧問などを通して、様々な形で学生に関わってきたつもりですが、定年前の2年間はコロナ禍で学生のいない閑散とした大学に通うことになったのが本当に残念でなりません（学生たちにとっては年寄りの長話に付き合わされなくてラッキーだったかもしれません）。あと2年、特任教員として勤めさせていただくつもりです。その間にコロナ禍が収束し、もう一度、通常教育と研究ができるようになることを願っています。最後になりますが、北海道大学のますますの発展をお祈りいたします。

略 歴

生 年 月 日 昭和33年11月28日
昭和57年3月 北海道大学水産学部卒業
昭和59年3月 北海道大学大学院水産学研究科修士課程水産化学専攻修了
昭和60年7月 北海道大学大学院水産学研究科博士後期課程水産化学専攻中退
昭和60年7月 北海道大学水産学部助手
平成6年12月 博士（水産学）（北海道大学）
平成12年4月 北海道大学大学院水産科学研究科助手
平成13年2月 北海道大学大学院水産科学研究科講師
平成17年4月 北海道大学大学院水産科学研究院講師
平成18年4月 北海道大学大学院水産科学研究院助教授
平成20年1月 北海道大学大学院水産科学研究院教授

水産科学研究院教授

おじま たかお
尾島 孝男 氏



昭和50年に教養部水産類に入学し、水産学部を卒業後大学院に進学、博士課程途中で助手に採用され、約40年の勤務を経て定年退職いたします。この間、多くの教職員の皆様、学友、卒業生の皆様から沢山の暖かいご支援とご指導を頂きました。ここに深く感謝申し上げます。

学部の卒業研究では、「軟体動物筋肉タンパク質の生化学的研究」という課題を頂きましたが、試料のサブユニット組成をゲル電気泳動で調べたり、ATPase活性を測定したりの毎日が楽しくて仕方がありませんでした。その勢いのまま大学院に進学し、日々研究に没頭していたところ、D2の終わりに助手に採用されるという思いがけない幸運に恵まれました。教員になってからは研究対象を多糖分解酵素などにも広げ、多くの共同研究者、大学院生たちと水産生物の各種機能タンパク質の探索と利用に関する研究に取り組みました。良い成果が得られない課題も多々ありましたが、長年北大教員として研究に取り組めたことには感謝の思いしかありません。

この2年余り、皆様新型コロナで大変だと思います。終息後には心新たに学究生活に戻られ、充実した学究生活を満喫されますことを心よりお祈り申し上げます。

略 歴

生 年 月 日	昭和31年12月 4 日
昭和54年 3 月	北海道大学水産学部卒業
昭和56年 3 月	北海道大学大学院水産学研究科修士課程修了
昭和58年 3 月	北海道大学大学院水産学研究科化学専攻博士後期課程中退
昭和58年 4 月	北海道大学水産学部助手
昭和59年12月	水産学博士（北海道大学）
昭和62年 3 月	北海道大学水産学部講師
平成 5 年 7 月	北海道大学水産学部助教授
平成12年 4 月	北海道大学大学院水産科学研究科助教授
平成16年11月	北海道大学大学院水産科学研究科教授
平成17年 4 月	北海道大学大学院水産科学研究院教授

地球環境科学研究院教授

すずき ひとし
鈴木 仁 氏



日本産ハツカネズミの起源、という研究テーマを博士課程の学生時代から現在まで取り組んできました。かれこれ四十年、この研究生活を終えるにあたり、先史時代の農耕民に帯同したハツカネズミの拡散の終着地である日本列島は、人類が長年培った農耕牧畜に関するリソースと知識、そしてそれらを携えた人材が集結した地域であることをハツカネズミが教えてくれたと考えるに至っています。「どうせ鈴木さんの頭の中はネズミのことで一杯でしょ」と同僚から賛辞をもらい、先輩からは、「進化をやっているわりには君は進化していないね」と激励の言葉をいただき、このたび、無事退職の日を迎えるにいたっています。この間、学生諸君、共同研究者を始めとおつきあいいただいた全ての皆様に感謝申し上げます。

この何年か、地震に停電に新型コロナと非日常的事態が立て続けに生じていますが、これらに対し身を粉にしてご対応いただいた諸先生および事務の方々には、心より感謝を申し上げる次第です。事務書類の作成が苦手で、北大在職中は多くの事務の担当者の方々には多大なご迷惑をおかけしました。ここに深くお詫び申し上げます。

略 歴

生 年 月 日	昭和31年12月 4 日
昭和54年 3 月	東北大学理学部卒業
昭和56年 3 月	広島大学大学院環境科学研究科修士課程修了
昭和60年 3 月	学術博士（神戸大学）
昭和60年 4 月	東京慈英会医科大学共同利用研究部遺伝子工学研究室助手
昭和63年 4 月	東京慈英会医科大学医科学研究所遺伝子工学研究室助手
平成 7 年 4 月	東京慈英会医科大学医科学研究所遺伝子工学研究室講師
平成 7 年 7 月	東京慈英会医科大学DNA医学研究所分子遺伝学研究部門講師
平成 8 年 1 月	北海道大学大学院地球環境科学研究科助教授
平成17年 4 月	北海道大学大学院地球環境科学研究院助教授
平成19年 4 月	北海道大学大学院地球環境科学研究院准教授
平成28年 3 月	北海道大学大学院地球環境科学研究院教授

理学研究院教授

やました ひろし
山下 博 氏



数学の教員として最初の6年半を京都大学で勤めた後、公私ともに心機一転、本学に赴任したのは27年前のことでした。丁度理学部の大学院重点化と同時でしたが、当時数学教室は理学部3・4号館（南校舎）と旧教養部S研究棟1階（北校舎）に分かれたままで、私は古い長屋風の北校舎に研究室をもつことになります。重点化直後の数学教室、特に北校舎は自由闊達な雰囲気と活気に満ちており、優秀で個性的な多くの同僚諸氏との出会いを得て、とても充実した長屋生活を送らせていただきました。専門とするリーマンの表現論で、思い入れのある長編の論文や本を書き上げたのもこの頃です。恵迪寮に向かう小径を散策しながら思索に耽ったのは懐かしい思い出です。

「南北統一」が実現し理学部4号館に移った平成15年頃からは、教育研究以外の仕事が増えました。21世紀COEプログラムや数学の将来構想に関わりつつ、教室での役どころを一通り終えた後は、大学評価や入試関係の仕事にも携わりました。評価室では書類との格闘に苦労しましたが、特に総長（役員）補佐としての5年間は大学の現況を客観的・俯瞰的に捉える良い機会となりました。

これまでお世話になった方々にこの場を借りて深く感謝申し上げます。4月からの再雇用期間も引き続き奉職し数学教員としての総仕上げにあたりたいと思っています。

略 歴

生 年 月 日 昭和34年2月10日
昭和57年3月 京都大学理学部卒業
昭和62年3月 京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了
昭和62年3月 京都大学理学博士
昭和62年4月 } 日本学術振興会特別研究員
昭和63年10月 }
昭和63年10月 京都大学理学部助手
平成7年4月 北海道大学大学院理学研究科助教授
平成14年4月 北海道大学大学院理学研究科教授
平成18年4月 北海道大学大学院理学研究院教授

理学研究院教授

じん ほ しゅういち
神保 秀一 氏



私は1993年に北大に着任したので約30年お世話になったことになります。思い出は限りなく多くあり、五木寛之が『老人は無限の思い出の海に泳ぐ』と表現した通りの実感です（溺れるだったかな）。なかでも全学教育（微分積分等）の授業での様々な出来事が印象強く思い出されます。実際これらの授業だけで計60コマ以上担当しました（学生3000人余）。

毎年、高校卒業したてのフレッシュな若者相手に話ができたので私は大変幸せ者だったと思っています。まだ教養部だった頃、新学期の授業中に授業に関係ない学生がドカドカと来て、“スポーツ大会の応援の勧誘を5分やらせて欲しい”と言う。断ると“やらせて下さい”（学生），“ダメです”（私），“北大生なら応援するのは当然じゃないですか”（学生），“それって課外活動だから授業と関係ありませんよ”（私）などと押し問答が（5分以上）続きました。

理学部の授業では解析系科目を担当し、特に偏微分方程式の科目はいつも楽しい授業でした。よく知っているつものの定理の証明を準備なしに始めてしまい、案の定途中でつまってしまい、図書室に本を見に行くはめになりました。こんな失敗も私の心の中では宝物です。

この間一緒に働いた同僚や事務の方々と北大の美しいキャンパスに感謝したいと思います。

略 歴

生 年 月 日 昭和33年
昭和56年3月 東京大学理学部数学科卒業
昭和62年3月 東京大学大学院理学系研究科博士課程修了
昭和62年3月 理学博士（東京大学）
昭和62年4月 東京大学理学部助手
平成2年4月 岡山大学教養部講師
平成4年4月 岡山大学教養部助教授
平成5年4月 北海道大学理学部助教授
平成7年4月 北海道大学大学院理学研究科助教授
平成11年4月 北海道大学大学院理学研究科教授
平成18年4月 北海道大学大学院理学研究院教授

理学研究院教授

へ き こうすけ
日置 幸介 氏



このたび規定年齢に達し、退職することになりました。北大の皆様のご厚情に感謝申し上げます。

北大在籍は18年に過ぎませんが、その分北大愛が小さいわけではありません。そもそも幼少時を過ごした北海道に馴染があり、高校の修学旅行で再訪した北大の広くて美しいキャンパスに憧れました。当時の自分には入試が簡単で物足りなく感じ、学生として北大に入ることはなかったのですが…。

その後、東大理学部と大学院に9年、郵政省の研究所に7年半、英国の大学に2年、国立天文台に9年半と大きく回り道しましたが、2004年に北大教授として憧れの地に来ることができました。それまでの職場と違ってプロジェクトの重圧のない理学部の仕事は楽しく、北大キャンパスの変わらない美しさに浸りつつ、気が付くと一番長く働いた場所になっていました。

学部生数人と立ち上げた宇宙測地学研究室は質、量ともに大きく成長しました。また在職中にM9クラスの地震が三回、今年は全球をゆるがす噴火が起きました。世界中のデータにアクセスでき、仕事として解析に打ち込める北大理学部教員の立場でそれらに対峙できたことは感謝に堪えません。四月からはさらに自由な立場で「転がる石に戻って、夢を食べて」生きていくことを楽しみにしています。

略 歴

生 年 月 日 昭和32年 3月15日
昭和54年 3月 東京大学理学部地球物理学科卒業
昭和59年 3月 東京大学大学院理学系研究科博士課程修了
昭和59年 3月 東京大学理学博士
昭和59年 4月 郵政省電波研究所郵政技官
昭和59年10月 郵政省電波研究所研究官
昭和63年 4月 郵政省通信総合研究所研究官
昭和64年 1月 郵政省通信総合研究所主任研究官
平成 6年12月 国立天文台地球回転研究系助教授
平成13年 4月 国立天文台地球回転研究系教授
平成16年 4月 北海道大学大学院理学研究科教授
平成18年 4月 北海道大学大学院理学研究院教授

理学研究院教授 等

やました まさかね
山下 正兼 氏



理類の学生として入学以降、50年近くを北海道大学にお世話になりました。他機関出身者を採用することで教員の多様化が図られ、「生え抜き」の教員はめっきり少なくなりましたが、自分が卒業した大学のスタッフになる道も開けていることを、身近なロールモデルとして学生に示せたのは良かったと思っています。全学教育では前期に開講される生物学を担当しました。入学時の目の輝きが、連休明けには曇っている学生が多いことに心を痛めました。北海道大学での学びの意義を初年次学生に明確に示し、学びへのモチベーションを維持させることは重要だと思います。

最近10年ほどは大学の管理・運営にあたる貴重な機会をいただきました。特に副学長として担当した「新渡戸スクール（現新渡戸カレッジ大学院教育コース）」では、日本人学生と留学生が協働する新しいスタイルの授業を経験することができて、大変勉強になりました。新渡戸カレッジのブランディングがさらに進み、大学として自信を持って修了生を送り出し、社会も信頼して修了生を受け入れることが常態化することを祈っています。

最後に、これまで支えてくれた学生さんたち、並びにスタッフ各位に深く感謝いたします。

略 歴

生 年 月 日 昭和31年11月15日
昭和54年 3月 北海道大学理学部卒業
昭和59年 9月 北海道大学大学院理学研究科博士後期課程修了
昭和59年 9月 理学博士（北海道大学）
昭和60年 4月 } 日本学術振興会奨励研究員
昭和61年 3月 }
昭和63年 4月 } 日本学術振興会特別研究員
平成元年 7月 }
平成元年 8月 岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所発生生物学研究系助手
平成 5年 4月 北海道大学理学部助教授
平成 7年 4月 北海道大学大学院理学研究科助教授
平成10年 4月 北海道大学大学院理学研究科教授
平成18年 4月 北海道大学大学院先端生命科学研究院教授
平成22年 4月 北海道大学大学院理学研究院教授
平成23年 4月 北海道大学大学院理学研究院院長・理学部長
平成27年 1月 北海道大学副学長
平成29年 4月 北海道大学大学院生命科学院長

理学研究院教授

なかがわ みつひろ
中川 光弘 氏

この度、平成元年に理学部地質学鉱物学科に赴任してからの、30年余りの北大教員生活を終えることになりました。活動的な火山や大規模カルデラ火山など、魅力ある研究対象が多い北海道、そして深い山を調査することを苦としない逞しい学生が沢山いる北大で、研究・教育生活を送ることができて本当に幸せでした。北海道だけではなく、北方四島を含む千島列島や中朝国境の白頭山など海外のフィールドに研究対象を広げることもできました。しかし在職中の平成3年～7年雲仙普賢岳、同12年三宅島、そして有珠山噴火での噴火対応を経験することで火山防災の重要性を痛感し、それ以降は火山学の研究成果をいかに社会に還元するかも考えた研究生生活でした。

一方で我々を取り巻く研究・教育環境は激変し、「地鉱」時代を知る最後の教員となってしまいました。研究室も重厚な雰囲気がかつた理学部本館3Fから6号棟11Fに移りました。そのきっかけとなった総合博物館を恨んだこともありましたが、その後に館長となり、リニューアルオープンを迎え多数の来館者数を誇る博物館に発展する過程に立ち会えたことも幸せでした。

今後しばらくの間は、現在進行中の複数の研究プロジェクトの仕上げのために大学に通うこととなりますが、運営や教育活動は終えることとなります。これまで長きにわたり支えていただいた、勝井義雄先生をはじめとする諸先生、職員そして学生・院生の皆様に感謝するとともに、北海道大学の益々の発展を祈念いたします。本当にお世話になりました。

略 歴

生 年 月 日	昭和31年10月3日
昭和55年 3 月	東北大学理学部卒業
昭和61年 3 月	東北大学大学院理学研究科博士後期課程修了
昭和61年 3 月	理学博士（東北大学）
昭和61年 4 月	} 民間（三菱鉱業セメント株式会社）
平成元年 3 月	
平成元年 4 月	北海道大学理学部助手
平成7年 4 月	北海道大学大学院理学研究科助手
平成16年 4 月	北海道大学大学院理学研究科教授
平成18年 4 月	北海道大学大学院理学研究院教授
平成27年 4 月	} 北海道大学総合博物館長
平成31年 3 月	

理学研究院教授

まつしま としや
松島 俊也 氏

研究者として教師として、長く曲がりくねった道のりも一区切りをつけることとなりました。多くの同僚や友人が病いのため、また途上に研究職を得ることかなわず、若くして科学の世界を去ったことを思うと、この長い道のりは大きな恵みであったことと、改めて感謝します。正直に申して、北海道に来るまでは、ろくでもない研究環境や愚かな上司たちのために苦杯をなめることが多くありました。しかし北大での16年間は、信じられぬほど自由に闊達に、多くを学ぶことを得ました。大学と学部学科のまっとうな運営姿勢、キャンパスの自然、学生諸君の高い資質と善良な研究意思、部局の垣根を越えた深い交流、これらを満喫した16年間でした。事務方や技術部の皆様も、長く続く定員削減の嵐の中で、最良の努力を誠実に務める方ばかりでした。教員としてはただ感謝のみです。これからの北大は、以前に増して多くの難題に曝されることと思いますが、美しい北海道に根を張った科学と教育の拠点として、一層の発展を続けていくことを祈念します。

略 歴

生 年 月 日	昭和32年1月26日
昭和56年 3 月	東京大学理学部卒業
昭和61年 3 月	東京大学大学院理学系研究科博士課程修了
昭和61年 3 月	理学博士（東京大学）
昭和61年 4 月	東京大学理学部助手
平成2年 4 月	カロリンスカ研究所神経生理学研究所博士研究員
平成4年 4 月	上智学院理工学部助手
平成7年 4 月	名古屋大学農学部助教授
平成11年 4 月	名古屋大学大学院生命農学研究科助教授
平成18年 1 月	北海道大学大学院理学研究科助教授
平成18年 4 月	北海道大学大学院理学研究院助教授
平成19年 4 月	北海道大学大学院理学研究院准教授
平成19年11月	北海道大学大学院理学研究院教授

理学研究院教授

ほりぐち たけお
堀口 健雄 氏



北大には、29年間にわたりお世話になりました。この間、本学の教育研究・運営に携わることができ、充実した日々を送ることができたことを幸せに思います。

卒業実習で出会って以来、単細胞の微細藻類・原生生物の多様性に魅入られてきました。研究分野は「系統分類学」で、これら単細胞生物の種多様性の解明や、分子的手法を用いた進化過程や葉緑体起源の解明などが主な研究課題となりました。単細胞生物と言っても決して「単純」ではなく、彼らの形態の多様さ・奇抜さ、生き様などに日々魅了され続けた研究生活でした。また、北大における研究生活の中では21世紀COE「新・自然史科学創成」プログラムに参加出来たことも、私にとっては大きな財産となりました。異分野融合による新しい観点からの研究の推進は、新鮮でわくわくする特別な経験となりました。海外への調査や国内外の研究者仲間との交流も良き思い出です。また、優秀な学生諸君にも恵まれました。一緒に研究をし、得られた成果に共に興奮する～そんな幸せな時間を共有してくれた学生諸君にはただただ感謝です。

最後になりましたが、これまで支えてくださいました先生方、事務の皆さん、技術部の皆さんに感謝申し上げます。北海道大学が唯一無二の存在感を放つ大学としてこれからも発展されることを祈念しております。

略 歴

生 年 月 日 昭和32年1月18日
昭和54年3月 筑波大学第二学群生物学類卒業
昭和59年3月 筑波大学大学院生物科学研究科博士課程修了
昭和59年3月 理学学博士（筑波大学）
昭和59年4月 日本学術振興会奨励研究員
昭和60年7月 ナチュラル大学ピーターマリツパーク分校植物学部研究員
昭和62年2月 ビットバータースランド大学植物学部研究員
昭和63年12月 信州大学教育学部助手
平成2年4月 信州大学教育学部附属教育工学センター助教授
平成4年4月 信州大学教育学部助教授
平成5年4月 北海道大学理学部助教授
平成7年4月 北海道大学大学院理学研究科助教授
平成18年4月 北海道大学大学院理学研究院助教授
平成19年4月 北海道大学大学院理学研究院教授
平成31年4月 北海道大学大学院理学研究院長・理学部長

農学研究院教授

さめしま りょうじ
鮫島 良次 氏



私は平成24年4月から北大農学研究院に在籍し、充実した10年を過ごせたことを感謝しております。北大以前は農研機構に在籍して、そこでは組織内での研究テーマの重複を慎重に避けるなど制約があり、それは当然のことと受け取っていましたが、大学は全く異なり、こういう自由さも大学の底力を支えているのだらうと感じました。

さて、さらに振り返りますと、私は昭和52年に北大理類に入学しました。教養時代のクラス名簿が手元に残っているのですが、約半数が北海道出身で、札幌域だけでなく名寄、滝川、岩見沢、本別、留萌、室蘭、釧路、北見、苫小牧、様似など北海道各地の高校出身者がいました。「俺の実家は番外地なんだよね」などと言う農村地域からの友人もいて、話しているとご当地文化の違いのようなものがありとても面白かった記憶があります。

私は東京出身ですが、東京の大学に進学していたら得られなかったであろう貴重な経験が多かったと思います。北大が、全国から集まる学生が素晴らしい経験を積める場であり続けることを願っています。

略 歴

生 年 月 日 昭和33年11月16日
昭和57年3月 北海道大学農学部農業工学科卒業
昭和57年4月 農林水産省農業技術研究所研究員
平成5年4月 農林水産省農業研究センター主任研究官
平成10年3月 博士（農学）（北海道大学）
平成11年4月 農林水産省北海道農業試験場研究室長
平成18年4月 （独）農業・食品産業技術総合研究機構
北海道農業研究センター研究チーム長
平成23年4月 （独）農業・食品産業技術総合研究機構
東北農業研究センター上席研究員
平成24年4月 北海道大学大学院農学研究院教授

農学研究院教授

あきもと しんいち
秋元 信一 氏

大学院博士課程の途中で助手に採用されて以来、農学部（農学研究院）で昆虫の分類や生態に関する研究を続けてきました。現在、若い研究者の就職状況があまりにも厳しい状況を見るにつけ、本当に恵まれた環境で研究のスタートを切れたのだと感じます。北海道の大自然を生かし、身近で見られる昆虫（雪虫やサツポロフキバツタ）を対象にして、長期的な視野に立って、じっくり研究に取り組めたことが最大の喜びです。幸い、多くの優秀な学生にも恵まれ、卒業生たちは昆虫学関連の大学教員、博物館学芸員、研究所職員として国の内外で活躍してくれています。同じテーマで長期的なデータを取る仕事ができただけでなく、職場の異動もなく、安定した研究環境を提供していただいた周囲の先生方と事務のみなさんのおかげと感謝しております。恵まれた環境の中で、特に怠けていたわけではありませんが、若い頃思い描いていた研究範囲の一部しか達成できなかったのは残念ですが、私の分野は顕微鏡ひとつと体力があれば進めていける分野なので、退職後もこれまで以上に研究を進展させたいと考え、講義も会議もない生活を心待ちにしています。

退職後も研究に頑張っておられる研究室の先代、先代先の先生方に習い、息長く研究を続けていければと考えております。

略 歴

生 年 月 日 昭和31年10月17日
昭和55年 3 月 北海道大学農学部農業生物学科卒業
昭和57年 3 月 北海道大学大学院農学研究科農業生物学専攻修士課程修了
昭和59年 9 月 北海道大学大学院農学研究科農業生物学専攻博士後期課程中退
昭和59年10月 北海道大学農学部助手
平成 7 年 3 月 博士（農学）（北海道大学）
平成 8 年 9 月 北海道大学農学部助教授
平成11年 4 月 北海道大学大学院農学研究科助教授
平成19年 4 月 北海道大学大学院農学研究院准教授
平成19年 6 月 北海道大学大学院農学研究院教授

農学研究院教授

きむら あつお
木村 淳夫 氏

漫然と化学を志望し入学しましたが、教養時代の先生や友人から生物学の面白さに目覚めさせられ、化学と生物学ができる農芸化学科に進学しました。それからの約40年を糖質酵素の研究に打ち込むことができ、得がたい大学生活を送ることができました。最近は糖質の構造と機能に魅了されております。

30年前に先代の教授とともに新しい教室を起こし、その後を継いで研究室の基盤構築に腐心しました。実験環境も十分でなく、設立初頭に所属していた学生さん達に不自由な思いをさせてしまいました。このような状況でも学生の熱意は素晴らしく、研究室を巣立った博士学生さんのほとんどが大学や公的研究機関で活躍しています。十分でない環境がむしろプラスに作用したと勝手に考えております。一方アジア諸国や欧米の研究者と共同研究を行い、特に米国・デンマーク・仏国・タイ・韓国の友人研究室に長期滞在し、研究を実施できたことは楽しい経験でした。最近はコロナ禍で海外渡航ができず、残念な気持ちでおります。

これまで幸福な大学人生を歩んできましたが、お世話になりました皆様に心から御礼を申し上げるとともに、ご健勝とご発展をお祈りいたします。

略 歴

生 年 月 日 昭和31年 9 月20日
昭和54年 3 月 北海道大学農学部農芸化学科卒業
昭和56年 3 月 北海道大学大学院農学研究科農芸化学専攻修士課程修了
昭和59年 3 月 北海道大学大学院農学研究科農芸化学専攻博士課程修了
昭和59年 3 月 農学博士（北海道大学）
昭和59年 4 月 北海道大学農学部研究生
昭和60年11月 北海道大学農学部助手
平成 4 年 4 月 北海道大学農学部助教授
平成11年 4 月 北海道大学大学院農学研究科助教授
平成13年 4 月 北海道大学大学院農学研究科教授
平成18年 4 月 北海道大学大学院農学研究院教授

農学研究院教授

こばやし やす お
小林 泰男 氏



トワエモアの虹と雪のバラードとともにTV画面に映った冬の札幌、蛍雪時代の巻頭を飾った夏の北大構内。本州の山間部育ちの自分には大きな憧れとなり、高2の夏に道内一周。志望校確定。大学説明会もオープンキャンパスもなかった時代に行動力を磨きました。学生時代も含め、計28年半を北大でお世話になりました。その間、研究内容も時代の要求に応えるべくシフトしていきました。畜産学は量から質へ、そして機能性へ。そして今は「環境保全と両立へ」の大きなうねりの中にあります。その過程で研究手法は革新的な進歩を遂げ、学生時代には夢のような解析が可能になりつつあります。日進月歩の技術革新の中、いかに農学研究にそれらを取り込み、実用的な成果として提供できるか、ない頭をひねりつつ苦闘してきたように思います。

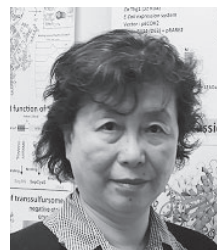
研究以外でも、大学院改組やジョイントディグリー締結、海外オフィス開所等尽力させていただきました。こういった中で日々の鬱たる思いを晴らしてくれたのが、北海道の自然、北大キャンパスの佇まいでした。日本国内の労働者で、いったい何人が朝の通勤時に野生のリスと出会うでしょう？素晴らしい大学に感謝しつつ、残り1年の特任教員生活で恩返しできればと思っています。

略 歴

生 年 月 日	昭和31年 5月28日
昭和54年 3月	北海道大学農学部畜産学科卒業
昭和56年 3月	北海道大学大学院農学研究科畜産学専攻修士課程修了
昭和57年 3月	北海道大学大学院農学研究科畜産学専攻博士後期課程中退
昭和57年 4月	三重大学農学部助手
平成 3年 6月	博士（農学）（北海道大学）
平成 5年 4月	三重大学生物資源学部講師
平成 6年 8月	三重大学生物資源学部助教授
平成12年 9月	北海道大学大学院農学研究科助教授
平成16年 4月	北海道大学大学院農学研究科教授
平成18年 4月	北海道大学大学院農学研究科教授

先端生命科学研究院教授

やお みん
姚 閔 氏



中国出身の私が北海道に憧れて来日、北海道大学に進学して、修士、博士課程を過ごしました。博士研究員などの時期を除いて、大学院生として5年間、教員として20年以上にわたり、春には澄み切った青空、夏には涼やかな空気、秋にはカラフルな紅葉、冬にはロマンチックな銀世界へと移り変わる、北海道の恵まれた自然の中で過ごさせていただきました。

振り返ると、中国の大学で身に付けたコンピュータ科学の知識と経験を背景に、北海道大学では全く異分野のタンパク質結晶学そして構造生物学分野へ進んだことは、研究の視野を広げ、斬新なアイデアを生み出す上において大変有意義でした。また、才能にあふれた学生の皆さんと親しく接し、若い光のきらめきの中で共に過ごした時間は、私の人生の宝物となり、育んだ若い命は大学教員として最も誇れるものになりました。

最後に、外国人である私を温かく受け入れていただいた北海道大学、ならびにお世話になりました教職員の皆様、支えていただいた研究室のスタッフ及び学生さんに心より御礼を申し上げるとともに、北大のさらなる発展を祈念いたします。

略 歴

昭和57年 2月	中国大連工学院計算機科学と工学科卒業
平成 7年 3月	北海道大学大学院理学研究科博士後期課程修了
平成 7年 3月	理学博士（北海道大学）
平成10年 9月	北海道大学大学院理学研究科助手
平成18年 4月	北海道大学大学院先端生命科学研究院助手
平成18年 9月	北海道大学大学院先端生命科学研究院助教授
平成19年 4月	北海道大学大学院先端生命科学研究院准教授
平成24年 6月	北海道大学大学院先端生命科学研究院教授

先端生命科学研究院教授

きんじょう まさ たか
金城 政孝 氏



学位取得後、すぐに北海道大学応用電気研究所に助手として採用されて、蛍光測定の研究分野に入りました。当時は畑違いの感覚があり、そのうち別の場所に異動するつもりでよこしまな考えを持っていたことを思い出しました。気が付くと、蛍光測定というキーワードを持ちながら、改組後の電子研や続いて生命科学研究院にお世話になり定年退職を迎えられたのは、じっくりと研究を続けることができた北大の雰囲気と広いキャンパスだと感謝しています。その間、研究分野を生き物と装置開発の二つの領域を維持してきたつもりですが、ただ、どっちつかずの研究だったかもしれないと、反省しています。

1991年から2年間、カロリンスカ研究所に滞在でき、その縁で北大・阪大細胞生物学WSや最近は蛍光イメージングに関する6回のHSIの開催、5回のLSの開講など、学生たちを通じて交流できたことはたいへん良い思い出です。このコロナ禍では、いずれの活動もオンラインに余儀なくされていますが、いずれまた対面でのワークショップ活動として復活できればと希望しています。

最後に、社会人として私を受け入れて育ててくれた北海道大学、お世話になりました教職員の皆様、研究室のスタッフ及び学生に感謝いたします。

略 歴

生 年 月 日 昭和31年12月24日
昭和54年3月 宇都宮大学農学部卒業
昭和60年3月 自治医科大学大学院医学研究科博士課程修了
昭和60年3月 医学博士（自治医科大学）
昭和60年4月 北海道大学応用電気研究所助手
平成4年4月 北海道大学電子科学研究所助手
平成9年4月 北海道大学電子科学研究所助教授
平成19年4月 北海道大学電子科学研究所准教授
平成19年6月 北海道大学大学院先端生命科学研究院教授

教育学研究院教授

あさかわ かずゆき
浅川 和幸 氏



北海道大学（以下、北大）には1993年に奉職し、29年間勤めました。北大が母校で、1978年に理類（何と懐かしい分類）に入学し、その後工学部、教育学部、大学院教育学研究科で学び、そのまま教育学部に助手として奉職し、現在に至っています。44年間も北大にいることになりました。その間、恵迪寮、北学寮、再び恵迪寮に入寮と、寮生活も長く、お世話になりっぱなしでした。寮時代の諸先輩方から、お前の人生は半径数キロメートルで収まっていると批判されました。

ところで、ずっと構内のメインストリートのランニングを続けました。小さかった木もどんどん太くなることを実感しました。エゾリスが棲む大学なんて素敵です。残念なのは、最近木を伐っても新しい木を植えず、どんどん緑がなくなっていることです。やっかい者扱いなのかな。北大は、近隣の子どもたちが自然に親しむ良い環境です。一大学の所有物とせず、札幌市民のコモン（共有物）として、自然景観も含めて、管理する体制が創られるべきだと思います。

最後になりましたが、北大が市民社会の重要な構成員として、太く成長してゆくことを期待します。

略 歴

生 年 月 日 昭和33年8月16日
昭和60年3月 北海道大学教育学部卒業
平成元年3月 北海道大学大学院教育学研究科修士課程修了
平成元年3月 教育学修士（北海道大学）
平成5年2月 北海道大学大学院教育学研究科博士後期課程単位修得退学
平成5年3月 北海道大学教育学部助手
平成12年4月 北海道大学大学院教育学研究科助手
平成16年8月 北海道大学大学院教育学研究科助教授
平成19年4月 北海道大学大学院教育学研究院准教授
平成26年4月 北海道大学大学院教育学研究院教授

メディア・コミュニケーション研究院
教授

いとう なおや
伊藤 直哉 氏



平成6年4月に北大に採用後、二つの部局の配置換えを経験し、大学院の創設も経験しました。しかしながら、説得コミュニケーション研究という専門の視点は変わらないまま、時代や社会環境、特に情報環境の変化と共に、その専門領域や対象は大きく変化してきました。この遍歴を象徴するように、国内学会に留まらず、国際学会の所属はより大きく変化し、時代ごとに移り変わって行きました。学会を飛び回っていたのは若き情熱過多のなせる業だったのでしょう。今、28年の長きに渡る北大にお世話になった時間から解放されると、「やっと自分の目指す方向とペースで研究ができる」という新たな情熱が沸き上がっているのを感じます。組織のための研究から解放された、自分自身の研究という居場所です。これからが本当の研究者人生を送ることができるのではという期待感は強く、新たな可能性に喜んでいるのは確かですが、それと同時に、このような機会を与えてくれた北海道大学には感謝の念が途絶えません。北の学問の拠点が、世界に輝き続けることを祈っています。

メディア・コミュニケーション研究院
教授

わたなべ こうへい
渡邊 浩平 氏



民間企業出身者は少なからずいるかと思いますが、広告会社勤務の出自を持つ北海道大学の教員はおそらく私一人ではないかと思っています。11年間、中国市場での広告業務にたずさわり、その後、私大を経て、北大の教壇に立ちました。以来21年、言語文化部、情報基盤センター、メディア・コミュニケーション研究院と所属は変われど、教えていることは変わらず、全学教育で中国語を、大学院では広告を中心としたメディア論を講じてきました。その間10年ほど東アジアメディア研究センターという組織の長をつとめ、中国大陆、韓国、台湾、香港などの国・地域のメディア研究と研究交流をすすめてきたことが、多少とも誇れる仕事です。これまでグループでの業務が多かったため、近年は、個人的な仕事として、かねてからやりたかった日本の近現代史で雑文を書いています。4年前に戦艦大和の学徒兵だった吉田満の伝記を著し、昨年は、北海道を軍事という側面から描いた『第七師団と戦争の時代』を上梓し、幸いにも、多くの読者からの反響を頂戴しました。

特任としてのこり2年、短い時間ですが、悔いのないように最後のつとめに励まねば、と決意をあらたにしています。

略 歴

生 年 月 日	昭和33年11月19日
昭和59年 3 月	立命館大学文学部文学科中国文学専攻卒業
昭和61年 3 月	東京都立大学大学院人文科学研究科中国文学専攻修士課程修了
昭和61年 3 月	民間（株式会社博報堂）
平成 9 年 3 月	
平成 9 年 4 月	愛知大学現代中国学部講師
平成13年 4 月	北海道大学言語文化部助教授
平成15年 4 月	北海道大学情報基盤センター助教授
平成19年 4 月	北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授
平成21年 4 月	北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院教授

メディア・コミュニケーション研究院
教授

てらだ たつお
寺田 龍男 氏



学生時代を含めると40年以上北大のお世話になりました。教員として赴任した当初はパソコンが使えず、教材は手書きのものをコピーしていました。投稿した原稿が手書きで先方に驚かれたこともあります。またインターネットの普及にも乗り遅れてしまい、メールが使えず教職員や学生のみなさんにはずいぶんご迷惑をおかけしました。

しかし研究や教育活動では、私は恵まれていました。研究に行き詰まって相談すると、年齢の上下にかかわらず先生方からはしばしば貴重なヒントを与えられました。また合計2年半も留学させていただき、今も感謝に堪えません。授業でも学生のみなさんの意表を突く質問が大きな刺激になったことは再三ありました。

部局の事務部や図書館職員の方々とはふだんから接していますが、そうでない方々も、ことばは失礼ですが縁の下で力持ちになって下さり、研究・教育・校務を支えていただきました。みなさまにはどんなに感謝しても感謝しきれません。

今は無事に定年を迎えられたことに安堵しています。

末筆ながら、みなさまのご健康とご活躍を、そして北海道大学のさらなる飛躍を祈っております。長い間ありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日	昭和33年 6月16日
昭和56年 3月	北海道大学文学部文学専攻卒業
昭和58年 3月	北海道大学大学院文学研究科修士課程修了
昭和61年 7月	ミュンヘン大学外国語としてのドイツ語専攻修士課程退学
昭和61年 9月	北海道大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学
昭和61年10月	小樽商科大学商学部講師
昭和63年10月	小樽商科大学商学部助教授
平成 3年 4月	北海道大学言語文化学部助教授
平成19年 4月	北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院教授

メディア・コミュニケーション研究院
教授

やまだ よしひろ
山田 義裕 氏



昭和62年に文学部助手に採用となり、その後配置換えとなった旧言語文化部で教育・研究活動の続け、気がつけば35年の月日が経っていました。私は学部も大学院も北大です。学生時代を含めると46年もの長きにわたりお世話になったことになります。

北大で仕事を始めた当初は、学生時代とあまり変わらぬゆったりとした時間の流れの中で、キャンパスの四季が移り変わるのを感じながら研究を楽しんでいたのを覚えています。ところが、それから10年も経たないうちに大学設置基準の大綱化、教養部廃止、それに伴う入試とカリキュラムの改革、大学院重点化等の改革が矢継ぎ早に進められました。平成16年に国立大学が法人化された後は、もはや北大キャンパスにかつての面影を見いだすのは難しくなっているように感じます。

ノスタルジーに浸るのはこれくらいにしましょう。この変革期の北大の中で、私の研究も大きく変わりました。学生時代に没頭していた理論言語学からコミュニケーション研究を経て、15年前に観光研究へと誘われました。私たちは「観光創造」という新たな研究領域を提唱しているのですが、観光創造を通じて出会った学生や教職員たちとの共同研究の営みは、私にそれまで味わったことのない喜びを与えてくれました。変革からは、苦しみだけではなく、喜びも生まれることを知りました。

北大には感謝の言葉しかありません。今後ますますの発展を祈念します。また、こうして定年で退職を迎えられたのは、ひとえに同僚の教職員や共に学んだ学生たちの支えがあったからこそです。心よりお礼申し上げます。

略 歴

生 年 月 日	昭和32年 2月26日
昭和55年 3月	北海道大学文学部文学専攻英語英米文学専攻課程卒業
昭和57年 3月	北海道大学大学院文学研究科修士課程英米文学専攻修了
昭和62年 3月	北海道大学大学院文学研究科博士後期課程英米文学専攻単位修得退学
昭和62年 4月	北海道大学文学部助手
昭和63年10月	北海道大学言語文化学部講師
平成 5年 2月	北海道大学言語文化学部助教授
平成18年 4月	北海道大学言語文化学部教授
平成19年 4月	北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院教授
平成25年 4月	北海道大学外国語教育センター長
平成27年 3月	
平成27年 4月	北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院長・北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院長
平成31年 3月	
平成25年 4月	北海道大学教育研究評議会評議員
平成31年 3月	

メディア・コミュニケーション研究院
教授

えぐち ゆたか
江口 豊 氏



北大文学部助手に採用されて以来、34年余り本学で教育、研究に取り組んで参りました。

今日まで曲がりなりにも健康を維持しつつ、定年を迎えられることは幸運だと感じております。浅学非才の身ではありましたが、優秀な学生と学び合う機会や自らの研究テーマに没頭できる時間（こちらは法人化以降年々少なくなりつつありますが）がいささかでも持てたことは、一期一会の言葉の意味を考えさせてくれました。しかし、何よりも感謝したいのは、教育、研究、大学運営面に秀でた多くの方々に助けられたことです。大学運営や教育活動の準備など、けっして人の目に触れないところで懸命に取り組む同僚の姿に多くを教えられつつ、しかも配慮を絶やさず、気持ちよく共に仕事をさせてもらう機会に恵まれてきました。法人化以前には想像もできないような組織の変革、変質も、やはり「仲間」の存在があったればこそ乗り越えられたのではと考えます。

北大生の皆さんには、ぜひとも広い世界に飛び出し、異なる文化や生活の息吹を肌で感じてもらい、一度は人間や社会の在り方を根本から考え直す機会をもっていただきたいと願っています。

略 歴

生 年 月 日	昭和32年 1 月26日
昭和55年 3 月	名古屋大学文学部文学専攻独文学専攻卒業
昭和59年 3 月	北海道大学大学院文学研究科修士課程独文学専攻修了
昭和62年10月	北海道大学大学院文学研究科博士課程後期独文学専攻退学
昭和62年10月	北海道大学文学部助手
平成 3 年 4 月	北海道大学言語文化部助教授
平成19年 4 月	北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院教授
平成19年 4 月	} 外国語教育センター長
平成21年 3 月	
平成19年 4 月	} 北海道大学教育研究評議会評議員
平成21年 3 月	

保健科学研究院教授

あさか ただよし
浅賀 忠義 氏



北海道大学に着任して30年が経ち、この度、無事に退職を迎えることになりました。前半は医学部保健学科の前身である医療技術短期大学部において、それまでの理学療法士としての臨床経験をベースに後輩育成のために奮闘した記憶が強く残っております。当時は教員と学生間の敷居もなく、在学時に築いた深い交流は卒業後数十年経ったいまでも薄れていません。今後も私の人生に楽しみをもたらしてくれる貴重な存在となることでしょう。

医学部保健学科への改組後は大学院保健科学院が設置され、学生との深い交流は学部生から指導する院生へとシフトしました。研究留学後はひとりで研究を進めていく中で孤独感も感じていましたが、彼らは徐々に相談できる程にまでに力をつけ、やがては逆に助けてもらえるまでに育ってくれました。このような優秀な学生に恵まれたのも本学に着任できたからであると痛感しております。

四季折々に目を見張るような景観をみせる広大な北海道大学のキャンパスでこのような幸運な年月を過ごすことができました。今までご支援いただきました全てのみなさまに深く感謝申し上げ、本学の益々の発展を願っております。長い間ありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日	昭和31年 7 月19日
昭和55年 3 月	室蘭工業大学工学部建築工学科卒業
昭和59年 3 月	北海道大学医療技術短期大学部理学療法学科卒業
平成 4 年 7 月	北海道大学医療技術短期大学部助手
平成 8 年 3 月	工学博士（室蘭工業大学）
平成14年 8 月	北海道大学医療技術短期大学部講師
平成15年10月	北海道大学医学部講師
平成17年 3 月	米国ペンシルバニア州立大学客員研究員
平成18年 6 月	北海道大学医学部助教授
平成19年 4 月	北海道大学医学部准教授
平成20年 4 月	北海道大学大学院保健科学研究院准教授
平成25年 4 月	北海道大学大学院保健科学研究院教授

保健科学研究院教授

さとう ようこ
佐藤 洋子 氏



昭和57年に北大病院に着任し、翌58年に医療技術短期学部¹に異動し、医学部保健学科、保健科学研究院と、およそ40年近い年月を北海道大学で過ごさせていただきました。看護師助産師の免許取得までの4年間も北大内で教育を受けましたので、長い期間をこの素晴らしいキャンパス内で過ごさせていただいたことは本当に幸せでした。

もともと臨床で助産師として周産期医療に携わりたいと看護師・助産師免許を取得したのですが、思うところがあり教育研究の場に身を置くこととなりました。それでもいつかは病院勤務に戻るつもりでいましたが、教員としての次々と新しい課題とそれに取り組む機会が与えられ今日に至りました。その中でもワシントン大学看護学部で文部省在外研究の機会を得たことは、臨床・教育・研究面に大きな刺激を受け、今でも記憶に残っています。

このように人生の大半を北海道大学において過ごしてまいりましたが、先輩、同僚、学生、職員の皆様方に恵まれ、私にとってかけがえのない時間となりました。

最後に、お世話になったすべての皆様方に心から感謝を申し上げますとともに、北海道大学の益々の発展と皆様のますますのご活躍をお祈り申し上げます。

略 歴

昭和57年 4 月 北海道大学医学部附属病院助産婦
昭和58年 4 月 北海道大学医療技術短期大学部助手
平成 2 年 4 月 北海道大学医療技術短期大学部講師
平成 4 年 7 月 米国ワシントン大学看護学部において文部省在外研究
平成 6 年 8 月 北海道大学医療技術短期大学部助教授
平成 7 年 3 月 北海学園大学大学院法学研究科法律学専攻修士課程修了
修士（法学）
平成14年 3 月 北海学園大学大学院法学研究科法律学専攻
博士後期課程単位修得退学
平成15年10月 北海道大学医学部助教授
平成16年 4 月 北海道大学医学部教授
平成20年 4 月 北海道大学大学院保健科学研究院教授

工学研究院教授

たん だ さとし
丹田 聡 氏



約40年前、北大で数学をやるか物理をやるか当時の教養の先生達に進路のヒントを聞きつつ、まだつぶしの利く物理を選んで運が回りはじめました。三本木先生と出会いそこでもらったテーマで修士学生時に論文を公表、現在もその物質で研究を行っております。

その物質群は北大オリジナルのMX2、MX3とよばれメビウス結晶、リング結晶、八の字結晶、CDWAB効果、カイラルCDW、ストライプCDWと今もずっと発見が続いています。Nature誌に公表後さらに運がめぐり「トポロジー理工学の創成」で21COEリーダーとして文科省から約10億円を頂くことができ学問の発展に寄与しました。

その時の勢いもあり20名の博士が育っていき、教授、准教授になっていきました。数学、物理、工学の融合で基本的ですから世界各地で流行しています。この北大発の「トポロジー理工学」は我々が死んでもきっと100年以上は「熱力学」並みに続いていくことでしょう。風のように自由であることを信条として生きてきた研究三昧の幸福な40年でした。有難うございます。

略 歴

生 年 月 日 昭和33年11月22日
昭和56年 3 月 北海道大学理学部卒業
昭和59年 3 月 北海道大学大学院理学研究科物理学専攻修士課程修了
昭和59年 4 月 民間（株式会社小松製作所・技術研究所・研究員）
平成元年 4 月 北海道大学工学部助手
平成 5 年12月 博士（工学）（北海道大学）
平成 6 年 2 月 北海道大学工学部助教授
平成 9 年 4 月 北海道大学大学院工学研究科助教授
平成13年 4 月 ヘルシンキ工科大学客員教授
平成16年12月 北海道大学大学院工学研究科教授
平成21年 4 月から現在 北海道大学トポロジー理工学教育研究センター長
平成22年 4 月 北海道大学大学院工学研究院教授

工学研究院教授

おがわ ひでゆき
小川 英之 氏



私は1977年に北大に入学いたしましたので、1876年に札幌農学校として創立した本学の101期生ということになります。その後学生として9年間、教員として36年間の延べ45年の長きにわたってたいへん世話になりました。気がついてみたら145年の歴史を誇る北大の三分の一近くに関わったことになり、それを思うとたいへん感慨深いものがありますとともに、それだけに北大に対する愛着は誰にも負けない自信があります。

私の専門は機械工学で、その中でもエンジン燃焼に関わる研究を基軸にして参りました。エンジンは機械の中でも最も機械らしいように感じられる方が多いかと思いますが、一方で燃料を食べ、空気を吸い、それをもとに仕事をするという点でたいへん人間的な機械です。温暖化問題がクローズアップされて化石燃料が利用しにくくなり、厳しい状況にあります。一方で再生可能な電気と二酸化炭素を原料として合成するe-fuelが実用に近いレベルにあり、それが実現するとカーボンニュートラルとなるため、大型自動車や船舶など電池+モーターで代替するのが困難な分野でまだまだ利用されて行くと考えられております。

北大の皆様には145年前にあの偉大なクラーク先生がおっしゃられたBoy's be ambitious!そしてBe gentleman!というお言葉を胸に、益々ご発展されることを祈っております。最後にこれまでお世話になりました皆様に心より感謝申し上げます。

略 歴

生 年 月 日 昭和33年 9 月20日
昭和56年 3 月 北海道大学工学部卒業
昭和58年 3 月 北海道大学大学院工学研究科機械工学専攻修士課程修了
昭和61年 3 月 北海道大学大学院工学研究科機械工学専攻博士後期課程修了
昭和61年 3 月 工学博士（北海道大学）
昭和61年 6 月 北海道大学工学部講師
平成元年 4 月 北海道大学工学部助教授
平成9年 4 月 北海道大学大学院工学研究科助教授
平成16年 4 月 北海道大学大学院工学研究科教授
平成22年 4 月 北海道大学大学院工学研究院教授

工学研究院教授

ライト オリバー バーナード
WRIGHT OLIVER BERNARD 氏



長い間お世話になっております。北海道大学の外国人正規教員として1996年に参りましたので、とても光栄です。

研究室を立ち上げ、熱心の学生とスタッフに恵まれ、2002年に世界初めての「結晶上のさざ波」を動画として撮影し、その後もいろんな音響的な研究に携わり、非常に楽しい期間でした。応用物理工学専攻の皆さんにとっても感謝しておりますし、大分ご迷惑ばかりをおかけしました気がしますが、なんとか許していただきたいと思います。最後の数年に日本語の力の蓄積もできたことも皆様のおかげだと思います。北海道らしい何とか「さー」も言うようになりました。部門長の2回の経験もできたことも名誉だと思います。（その時は何とかさーを言わないようにしました。）

学生の教育もとても面白くて、私が講義で言ったイギリス風の冗談にも学生は吹き出さずに我慢したと思います。一回講義にかかわった学生からエゾ鹿の角という、北海道らしいプレゼントをいただきまして、嬉しかったです。

大学の中の他の学部・事務などの友達もできて、とても「あばよ」を言えない気分です。

これからですが、工学部の新しい制度で、研究を北海道大学で続けることになりました。まだまだ侍の最後の挨拶という時期になっていないと望んでおります。

略 歴

昭和53年12月 オックスフォード大学物理学科卒業
昭和57年 3 月 フランス国立中央科学院低温物理学研究所研究員
昭和58年 4 月 ケンブリッジ大学キングスカレッジ大学院物理学専攻修了
昭和58年 4 月 Ph.D（ケンブリッジ大学）
昭和58年 9 月 シュルンベルジュ社モントロージュ研究所研究員
昭和61年12月 新日鐵（株）エレクトロニクス研究所主任研究員（参事補参事）
平成6年 2 月 イタリア国立中央科学院コルビーノ研究所研究員
平成7年 5 月 フランス国立中央科学院振動物理計測研究所研究員
平成8年 5 月 北海道大学工学部教授
平成9年 4 月 北海道大学大学院工学研究科教授
平成22年 4 月 北海道大学大学院工学研究院教授

工学研究院教授

ごうはら かずとし
郷原 一壽 氏



平成6年3月末にバタバタと引越しの荷物をまとめて名古屋を後にし、3月31日に雪景色の札幌に到着、4月1日に北大に着任した。それまで雪の生活とは全く縁の無い生活を送ってきたためか、あの年ほど季節の移り変わりを感じたことはなかった。降り積もった雪が4月上旬に融け始め、白一色だった大地が黒い地肌を一瞬のぞかせて、5月初めには草木の芽が緑の顔を出し、桜・ライラック・タンポポの薄紫や白、黄色が彩を添え、鮮やかな緑にすっかり覆われる。そして、日本の中で最も羨ましがられる憧れの季節となる。北の大地では毎年繰り返している、当たり前の光景であるのに、既に30代半ばを過ぎても、季節の移り変わりの新鮮さを強く感じている自分に少々戸惑ったことを鮮明に覚えている。

あれから約30年が過ぎ、「歳月人を待たず」を実感している自分と、北の大地の新鮮さを感じ続けている自分が居る。当たり前の自然現象のなかに、われわれが気付いていないことがまだまだ沢山ありそうで、ぜひとも、新鮮な驚きを肌で感じ続けて行きたいものである。

略 歴

生 年 月 日 昭和32年1月18日
昭和55年3月 静岡大学理学部卒業
昭和57年3月 名古屋大学大学院工学研究科修士課程修了
昭和57年4月 名古屋大学工学部文部技官
昭和60年7月 名古屋大学工学部助手
昭和63年2月 工学博士（名古屋大学）
平成3年11月 名古屋大学工学部講師
平成4年4月 中部大学工学部助教授
平成6年4月 北海道大学工学部助教授
平成9年4月 北海道大学大学院工学研究科助教授
平成15年4月 北海道大学大学院工学研究科教授
平成22年4月 北海道大学大学院工学研究院教授

経済学研究院教授

その しん た ろ う
園 信太郎 氏



レナード・ジミィ・サヴェジは、ブルーノ・デ・フィネッティの主観主義とジョン・フォン・ノイマンの形式主義とを融合させた天才である。しかし彼は、自己宣伝をしなかった。彼の基礎論は第1章のみを読むと誤解を招くが、第4章を熟読すれば、彼の関心が確率の定義であることがわかる。確率とはなにか、それはどうあるべきかが、彼の一生の課題であり、このことは彼の基礎論と論文集とを視ればわかる。おもうに、老若男女を問わず、学徒の本務とは真理の探究ではないのか。有用性や名利はいわば副産物である。ジミィはまぎれもなく一個の学徒であった。彼の業績は今後をも生きぬく。

略 歴

生 年 月 日 昭和31年9月30日
昭和54年3月 東京大学理学部数学科卒業
昭和56年3月 東京大学大学院理学系研究科数学専門課程修士課程修了
昭和59年8月 東京大学大学院理学系研究科数学専門課程第1種博士課程単位修得退学
北海道大学経済学部助教授
昭和60年5月 東京大学大学院理学系研究科数学専門課程第1種博士課程修了
理学博士（東京大学）
平成12年4月 北海道大学大学院経済学研究科助教授
平成14年9月 北海道大学大学院経済学研究科教授
平成29年4月 北海道大学大学院経済学研究院教授

経済学研究院教授

は せ がわ ひかる
長谷川 光 氏



早いもので、北大に就職してから30年が経ち、定年退職を迎えることになりました。私が北大に勤め始めた頃は、大学内の雰囲気も落ち着いていて、どこか素朴でのんびりとしていました。その後、国立大学に「改革」の波が押し寄せ、大学院重点化や国立大学法人化などが行われました。これらの「改革」は良い面もあったかもしれませんが、「改革」、「改革」と気忙しく、勤務当初に抱いていた穏やかでのんびりとした北大らしさが失われてきているようで、少し寂しい感じもします。

あるテレビ番組で、「大人になると時間が経つのが早く感じるのはトキメキがなくなったから」ということを述べていました。確かにこの30年はあっという間に過ぎていきましたので、心が高揚する出来事は少なかったのかもしれませんが、しかし、仕事の面で多少の心のざわつくことはあったとしても、北大での教員生活を穏やかに恙なく過ごせたとも考えています。このことは、この30年間の同僚の教職員の皆さんや学生さん、また、私事で恐縮ですが、妻をはじめとする家族のおかげだと感謝しています。

略 歴

生 年 月 日 昭和31年10月19日
昭和56年 3 月 上智大学経済学部卒業
昭和61年 3 月 神戸大学大学院経済学研究科博士後期課程単位取得退学
昭和61年 4 月 近畿大学商経学部専任講師
平成 4 年10月 北海道大学経済学部助教授
平成12年 8 月 北海道大学大学院経済学研究科教授
平成29年 4 月 北海道大学大学院経済学研究院教授

経済学研究院教授

よねやま ゆうじ
米山 祐司 氏



北海道大学には、学部、大学院、助手時代から現在まで30年お世話になりました。途中、他大学に勤めていたことがありますが、圧倒的な時間をエルムの梢を見上げながら過ごしてきたことになります。北海道大学に戻る前には大学院重点化が行われており、以前と比して大学院生、特に留学生が多くなっていることに驚きました。以来、毎年のように、中国からの留学生を受け持ってきました。日中間の理解に少しでも貢献できればと考えていましたがどうだったでしょうか。

経済学研究科では、今までの大学院教育とは目的と内容の異なる専門職大学院として会計専門職大学院を立ち上げました。当大学院では、会計学分野で多様な科目を設定し、濃密な授業を展開してきています。この会計専門職大学院には初年度から参加しましたが、会計のプロフェッションを目指す大学院生たちとの授業は教員にとってもなかなか刺激的でした。専門分野で、一般的な大学院と専門職大学院での教育を担当できたのは大変楽しい経験であったと感じています。

北海道大学での教育と研究を支えてくださった教職員の皆様に感謝するとともに、母校のますますの発展を期待しています。

略 歴

生 年 月 日 昭和31年11月20日
昭和56年 3 月 北海道大学経済学部経済学科卒業
昭和58年 3 月 北海道大学大学院経済学研究科経営学専攻修士課程修了
昭和61年 3 月 北海道大学大学院経済学研究科経営学専攻博士後期課程単位修得退学
昭和61年 4 月 北海道大学経済学部助手
平成元年 4 月 釧路公立大学経済学部講師
平成 7 年 4 月 釧路公立大学経済学部助教授
平成11年 9 月 博士（経営学）（北海道大学）
平成12年 4 月 札幌大学経済学部教授
平成17年 4 月 北海道大学大学院経済学研究科教授
平成29年 4 月 北海道大学大学院経済学研究院教授

医学研究院教授

さ べ ひさたか
佐邊 壽孝 氏



ずっと関西で過ごしてきました私が札幌の地を踏んだのは13年前の初夏でした。一時期ニューヨークマンハッタンにも住んでいましたが、札幌はニューヨークと緯度も近く、生えている木々の様子も似ており大変親しみを覚えしました。遊びに来た子供達も、これまで見た街の中で一番きれいだと言っていました。余談ですが、北海道は『北の』大地などではなく、世界地図上での文明文化『中核地』です。札幌はヨーロッパではミラノあたりで、パリよりもずっと南です。まだまだ伸び代があります。研究者として最終段階をこの地で過ごせたことをたいへんありがたく思います。

日本では大学も定年制を取っており、3月をもって教授職を退職しますが、研究者をやめるわけではありません。まだまだ研究を続けます。しかし、これまでのような基礎研究を続けるのではなく、研究成果の『答え合わせ』をしなくと思います。基礎研究はともすれば検証不可能であり、机上の空論になるやしません。この数年、癌、免疫、心不全を同一平面で捉える研究を行ってきました。果たして私たちの研究成果は北大の目指す『実学』であるのかどうか、『揺るがない何か』を示せたのかを検証したいと思います。皆様におかれましては引き続きご指導ご鞭撻賜りますよう何卒宜しくお願い申し上げます。

略 歴

生	年	昭和32年
昭和55年 3月	京都大学理学部	卒業
昭和57年 3月	京都大学大学院理学研究科化学専攻修士課程	修了
昭和60年 4月	中曽根対がん10ヵ年計画特別研究員	
昭和61年 3月	京都大学大学院医学研究科博士課程	修了
昭和61年 5月	医学博士（京都大学）	
昭和61年 7月	京都大学医学部	助手
昭和63年 7月	京都大学遺伝子実験施設	助手
平成2年 7月	米国ロックフェラー大学	博士研究員
平成5年 9月	米国ロックフェラー大学	助教授
平成5年10月	京都大学ウイルス研究所	助教授
平成7年10月	JSTさきがけ21	研究員（兼任）
平成10年 4月	大阪バイオサイエンス研究所	研究部長
平成11年 4月	京都大学連携大学院	教授（兼任）
平成12年 4月	大阪大学連携大学院	教授（兼任）
平成21年 7月	北海道大学大学院医学研究科	教授
平成29年 4月	北海道大学大学院医学研究院	教授
平成29年 4月	慶應義塾大学医学部	客員教授（兼任）

歯学研究院教授

た む ら ま さ と
田村 正人 氏



北海道大学に着任したのは2001年ですので20年以上の日々を過ごしてきました。特に縁もゆかりもありませんでしたが、大きな夢を抱いてこの北の大地にやってきた日を思い返します。美しい自然あふれるキャンパスと恵まれた研究環境で心が躍りました。当時は法人化前の国立大学で、今とは大きく違って何事にもゆとりがあった良き時代でした。先輩の方々からはさまざまなことを教えていただき、意欲ある優秀な大学院生・学部学生や教職員の方々とともに多くのことを学んできました。私の研究生生活の初期の頃から、生化学の分野では新たな生体内分子が次々と分離・同定され、生命現象の理解がどんどん進むワクワクした時代でした。私なりに努力し研究成果を挙げてきましたが、着任当時の思い描いていた夢とは少し違いを感じつつ退職の日を迎え、至らなく非力であったという思いもあります。しかし、公私ともに楽しく充実しとても刺激的な多くの時間を過ごすことができ、幸せな生活を送らせていただきました。温かく受け入れていただき、長きにわたり支えていただいた北海道大学ならびに皆様に深く感謝申し上げます。

あと少し、特任教員としてお世話になります。残された時間はわずかですが、次の世代に研究・教育を引き継ぐべく自分なりの役割を果たせればと思います。

略 歴

昭和62年 3月	鹿児島大学歯学部卒業
平成3年 3月	東京医科歯科大学大学院歯学研究科博士課程修了
平成3年 3月	歯学博士（東京医科歯科大学）
平成3年 5月	鹿児島大学歯学部助手
平成4年 4月	東京医科歯科大学難治疾患研究所助手
平成9年 9月	鹿児島大学歯学部助手
平成11年 4月	鹿児島大学歯学部助教授
平成13年 9月	北海道大学大学院歯学研究科教授
平成29年 4月	北海道大学大学院歯学研究院教授

歯学研究院教授

ふじさわ としあき
藤澤 俊明 氏



昭和61年4月1日に当時の歯学部附属病院助手の職を拝命し、令和4年3月までの37年間北海道大学の教員として、臨床、教育、研究に携わってきました。

毎日歩いて通う北海道大学構内の見慣れた自然豊かな風景は私にとってはごく当たり前の景色です。私は、北海道大学歯学部入学が47年前で、入学前の1年間、北大構内を縦断して予備校に通っていたので、トータル48年間、実に半世紀弱もこの緑の北大の構内を歩いて通い、勉学に勤しみ、そして、医療人、教員として仕事をさせていただいたことになります。あと1ヶ月で大学を去ることになり、他大学の先生が羨ましがる恵まれた環境の中で時を過ごすことができたのだと思うと、とても感慨深いものがあります。

歯科麻酔という歯科・口腔外科手術の全身管理を担当する分野に興味を持ち、口腔外科麻酔班にお世話になり、昭和61年の診療科新設、大学院歯学研究科歯科麻酔学講座への昇格、病院統合、そして、教授職拝命にて教室運営といくつかの節目を迎え、次のステップへと立ち向かってきました。未だ道半ばの感も否めませんが、定年を迎え、今まで支えていただいたまわりの皆様に感謝しつつ大学を去りたいと思います。

北海道大学、及びその構成員の皆様には厚く御礼申し上げますと共に、皆様のご健勝とご活躍を心からお祈り申し上げます。

略 歴

生 年 月 日 昭和31年10月21日
昭和57年 3 月 北海道大学歯学部卒業
昭和61年 4 月 北海道大学歯学部附属病院助手
昭和63年 4 月 北海道大学歯学部附属病院講師
平成 3 年 9 月 歯学博士（北海道大学）
平成10年 2 月 北海道大学歯学部附属病院助教授
平成12年 4 月 北海道大学大学院歯学研究科助教授
平成19年 4 月 北海道大学大学院歯学研究科准教授
平成24年 4 月 北海道大学大学院歯学研究科教授
平成29年 4 月 北海道大学大学院歯学研究院教授

獣医学研究院教授

あぐい たかし
安居院 高志 氏



北大獣医では実験動物（医）学というものを学生及び教員の方々に理解して頂くことに腐心しました。学生からは授業アンケートに、我々は動物の命を救いたくて獣医学部に入学したのに何故動物を傷つけ苦しめる実験動物学を学ぶ必要があるのかということを書かれました。先輩教授からは、医学部では人の病気のモデル動物の研究をやっていたかもしれないが、獣医に帰ってきたからには動物の病気のモデル動物の研究をしろと言われました。どちらも実験動物学を狭く捉えすぎた考えです。獣医師は実験動物に寄り添い研究と関係ない病気や怪我を治療し、研究のために病気にさせられた場合はその苦痛を軽減してあげる、それが獣医師の役割であり、だからこそ獣医学部で実験動物学を学ぶのだと学生には説明しました。先輩教授には、実験動物とはそもそも人の病気や医薬品開発のためにあるものであり、動物のことを熟知している獣医師が研究するのが最適であるから獣医学部でも人の疾患モデルの研究を行うのだと理解して頂きました。

今ではこのようなナイーブな哲学論争は必要ないと思います。今後も北大獣医において実りある実験動物学の教育・研究が続くことを祈念しています。

略 歴

生 年 月 日 昭和31年10月13日
昭和54年 3 月 北海道大学獣医学部卒業
昭和59年 3 月 北海道大学大学院獣医学研究科博士課程単位取得退学
昭和59年 6 月 獣医学博士（北海道大学）
昭和59年 4 月 } 日本学術振興会 奨励研究員
昭和59年 9 月 }
昭和59年 9 月 米国National Institutes of Health 研究員
平成 1 年 4 月 徳島大学医学部助手
平成 4 年12月 名古屋市立大学医学部助教授
平成14年 9 月 北海道大学大学院獣医学研究科教授

文学研究院教授

おおいし いくお
大西 郁夫 氏

新入生として北大に入学したのが1977年春です。それから北大にずっとお世話になりっぱなしで、気づけば人生の三分の二以上をここで過ごしたことになり呆然としています。全国でも数少ないロシア文学専攻（当時）を目指して、はるばる大阪からやってきた高校生にとって、四月の札幌は半ば異国のようなものでした。西に見える手稲山には残雪、大阪では見ることもない白樺やポプラ並木…ただ何よりも違っていたのは、町と大学に流れる時間の穏やかさでした。大阪は信号が青に変わった瞬間歩き出す速度が日本一早いのだそうです。けれど札幌に流れる時間はどこか悠々としたものに感じられました。

恩師の灰谷慶三先生は授業では厳しく学生を鍛える方でしたが、こと研究に関しては急かすことなく、ゆったりと時間を与えてくれました。そうしたおおらかな北大の校風が、呑み込みの悪い私に研究での試行錯誤を許してくれたのだと思います。恩師以外にも、数多くの先輩、後輩、同僚の諸先生にはお世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。そして何よりも、私が教師と名乗れたのは、授業を聴いてくれた学生さんたちがいたおかげでしかありません。その一人一人に心から感謝しています。そして何よりも、豊かな時間を与えてくれた北海道大学に、校歌のごとく「永遠の幸」を願ってやみません。

略 歴

生 年 月 日	昭和33年 9月16日
昭和57年 3月	北海道大学文学部卒業
昭和61年 3月	北海道大学大学院文学研究科修士課程修了
昭和61年 3月	文学修士（北海道大学）
平成元年 3月	北海道大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学
平成元年 4月	北海道大学文学部助手
平成12年 4月	北海道大学大学院文学研究科助教授
平成19年 4月	北海道大学大学院文学研究科准教授
平成28年 4月	北海道大学大学院文学研究科教授
平成31年 4月	北海道大学大学院文学研究院教授

情報科学研究院教授

あらき けんじ
荒木 健治 氏

北海道大学に着任してから20年以上が経ち、この度退職を迎えることになりました。私立大学から学生時代を過ごした大学に戻ることになり、これから学生達とどのような研究をしようかと心を躍らせていたのが昨日のこのようです。

これまで3回米国スタンフォード大学のCSLI（言語情報研究所）の客員研究員として滞在し研究を行いました。その際に学んだ多様性、新規性を重んずる文化に大きな刺激を受け、帰国後に日本でも米国の大学のような研究室を作れないかと考え、様々な国から優秀な留学生を受け入れ、多様な視点から研究を行いました。また、新規性としては自然言語処理分野で初めて遺伝的アルゴリズムを応用しました。自然言語処理分野の最も難関な国際会議であるACL2003を現地実行委員長として欧米以外で初めて札幌で開催したことも良い思い出です。現地スタッフとして参加した私の研究室の学生にも非常に刺激があったようで、その後国際会議での発表はもちろん留学希望者が大きく増えました。これまで年に何度も国際会議に学生と一緒に参加し世界中の非常に大きな推進力となりました。

これからも特任教授として北海道大学に勤務する予定です。微力ですが教育、研究に貢献できればと考えています。

略 歴

生 年 月 日	昭和34年 2月11日
昭和57年 3月	北海道大学工学部電子工学科 卒業
昭和60年 3月	北海道大学工学研究科情報工学専攻修士課程修了
昭和63年 3月	北海道大学工学研究科電子工学専攻博士課程修了 工学博士（北海道大学）
昭和63年 4月	北海学園大学工学部助手
平成 1年 4月	北海学園大学工学部講師
平成 3年 4月	北海学園大学工学部助教授
平成10年 4月	北海学園大学工学部教授
平成10年 9月	
平成10年10月	北海道大学大学院工学研究科助教授
平成14年10月	北海道大学大学院工学研究科教授
平成16年 4月	北海道大学大学院情報科学研究科教授
平成31年 4月	北海道大学大学院情報科学研究院教授

情報科学研究院教授

おがさわら さとし
小笠原 悟司 氏

略 歴

生 年 月 日 昭和33年 7月27日
昭和56年 3月 長岡技術科学大学工学部電気電子システム工学課程
(第3学年編入) 卒業
昭和58年 3月 長岡技術科学大学大学院工学研究科電気・電子システム工学専攻
修士課程修了
昭和58年 4月 長岡技術科学大学工学部助手
平成 2年 3月 工学博士(長岡技術科学大学)
平成 4年 8月 岡山大学工学部助手
平成 5年 4月 岡山大学工学部助教授
平成15年 4月 宇都宮大学工学部教授
平成19年 4月 北海道大学大学院情報科学研究科教授
平成31年 4月 北海道大学大学院情報科学研究院教授

北海道大学副学長, 病院長, 教授

あきた ひろとし
秋田 弘俊 氏



入学以来半世紀近くにわたり、北海道大学にお世話になりました。

大学卒業後は現在まで一貫して、「難治がん克服」に挑戦し、充実した時間を過ごさせていただきました。3つのマージ、すなわち、生命科学と臨床医学、臨床研究と診療、遺伝子分子診断と治療薬選択のマージに取り組んできました。特に、がん遺伝子やドライバー遺伝子変異、分子標的治療薬について、基礎研究からTR研究、臨床試験に至るまで研究する機会をいただきました。研究成果の一端が、コンパニオン診断に基づくがん分子標的治療やがんゲノム医療などを通して、難治がんに苦しむ患者さんの治療や予後改善につながったことは大きな喜びです。このような時代に研究者として、また医師として活動できた幸運に対して、またその場を提供してくださった北海道大学に対して、心から感謝しています。

また、医学部では研究科長補佐(医学科教務委員長)や医学部図書館長、病院では病院長、全学では副学長として、大学の管理運営に関わる貴重な機会をいただきました。

北海道大学の今後、益々の発展を祈念しています。

略 歴

生 年 月 日 昭和31年
昭和56年 3月 北海道大学医学部卒業
昭和62年 3月 北海道大学大学院医学研究科博士課程修了
昭和62年 3月 医学博士(北海道大学)
昭和62年10月 } 米国国立癌研究所 Fogarty Visiting Fellow
平成 2年 3月 }
平成 2年 4月 北海道大学医学部附属病院助手
平成 9年10月 北海道大学医学部附属病院講師
平成13年 8月 北海道大学大学院医学研究科教授
平成28年 4月 北海道大学病院副病院長
平成29年 4月 北海道大学大学院医学研究院教授
平成31年 4月 北海道大学病院長、北海道大学副学長

北海道大学病院教授

い こま かつのり
生駒 一憲 氏

私は平成13年4月に、大学院医学研究科リハビリテーション医学分野の助教授として北海道大学に着任いたしました。それまでは北海道には全く縁がなく、旅行でさえ訪れたことはありませんでした。着任前の2月に住居を探すために札幌を訪れたときにはその雪の多さに驚いたものです。それから21年が経ち、このたび無事定年を迎えることができたことは、ひとえに北海道大学の皆様のご支援のおかげと感謝をしております。

北海道大学在職中の平成18年4月からは、北海道大学病院リハビリテーション科を担当させていただき、病院ではリハビリテーション診療と研修医や専攻医の指導、医学部では学生講義と実習指導、大学院では院生の研究指導などをして参りました。さらに、病院では高次脳機能障害支援普及事業での北海道の拠点機関として活動し、北海道、各地区の保健所、障害者施設などの方々と交流をさせていただきました。また、北海道医師会常任理事や病院の産業医の仕事もさせていただきました。これらは、とすれば視野が狭くなりがちのところ、いろいろ教えられることも多く、私の貴重な財産となっております。

最後になりましたが、北海道大学の益々の発展を祈念して、この稿を閉じたいと思います。

略 歴

昭和58年3月 奈良県立医科大学医学部卒業
 平成7年10月 医学博士（奈良県立医科大学）
 昭和58年5月 奈良県立医科大学附属病院臨床研修医
 昭和58年7月 静岡済生会総合病院臨床研修医
 昭和60年4月 静岡済生会総合病院医員
 昭和61年4月 奈良県立医科大学附属病院医員
 昭和63年4月 奈良県立医科大学医学部助手
 平成8年1月 奈良県立医科大学医学部講師
 平成13年4月 北海道大学大学院医学研究科助教授
 平成18年4月 北海道大学病院教授

低温科学研究所教授

こううち あきら
香内 晃 氏

1982年に低温科学研究所の物理学部門に赴任して以来、40年弱在籍し、研究三昧の生活を送ることができました。1995年には、低温科学研究所は全国共同利用の研究所に改組され、新たに設置された低温基礎科学部門の惑星科学分野を担当してきました。この間、一貫して、宇宙の条件を実験室で再現し、星間分子・氷・有機物が宇宙でどのようにしてできたかを模擬実験で調べてきました。幸い、諸先生のご指導、優れた同僚の協力、研究を推進する上での充実した環境も相まって、それらの生成機構の一端を明らかにすることができました。この場をお借りして、心からお礼申し上げます。

大学に所属する研究所の最も重要な使命は、大学院等では実施することが困難な息の長い研究を行い、次世代の新たな研究の芽を見つけることです。役に立つ研究かどうかより、自然の理を明らかにする研究、もしくは知的好奇心を満足する研究を行うことが大学の研究所としては重要だと思っています。時流に流されない研究を、腰を据えて行っていきたいものです。

最後に、低温科学研究所および北海道大学のますますの発展をお祈り申し上げます。

略 歴

生 年 月 日 昭和31年11月15日
 昭和54年3月 東北大学理学部地学科卒業
 昭和56年3月 東北大学大学院理学研究科博士課程前期修了
 昭和57年11月 東北大学大学院理学研究科博士課程後期退学
 昭和57年12月 北海道大学低温科学研究所助手
 昭和60年3月 理学博士（東北大学）
 平成7年12月 北海道大学低温科学研究所教授
 平成19年4月 } 北海道大学低温科学研究所長
 平成23年3月 }
 平成19年4月 } 北海道大学教育研究評議会評議員
 平成23年3月 }
 平成25年4月 } 北海道大学企画・経営室室員
 平成29年3月 }
 平成29年4月 } 北海道大学総長補佐
 令和2年9月 }

触媒科学研究所教授

にしだ
西田 まゆみ 氏



オイルショックで就職難だった時代に、幸運にも大学の研究室の先生から私大の助手の仕事をご紹介頂いたことから私のアカデミアでのキャリアがスタートしました。その後、北海道大学薬学部で有機金属触媒反応の研究に従事しましたが、そこで身に着けた知識・技術が、インダストリーであれ程役に立つとは、当時は思いもよりませんでした。北大で8年間過ごした後、思い切って飛び込んだインダストリーの世界でしたが、当時バブルがはじけて赤字だった広栄化学工業株式会社において、ポリオレフィン製造用触媒受託合成の新規事業を立ち上げ、赤字解消に貢献し、執行役員に昇格しました。大学での研究が企業での新事業立ち上げに役に立ったという貴重な経験だったと思います。このインダストリーでの経験をもとにもう一度北大に戻り、触媒科学研究所で「アカデミアとインダストリーの架け橋」として産学連携の仕事に従事することになりました。

アカデミアからインダストリーを経てまたアカデミアという目まぐるしく環境が変わる中で、北海道大学で働くことができた日々は私の人生の宝と思っています。お世話になりましたすべての方々に御礼を申し上げますと共に、大学の発展をお祈り申し上げます。

略 歴

生 年 月 日	昭和32年 2月27日
昭和54年 3月	筑波大学第一学群自然科学類化学系卒業
昭和55年 4月	帝京大学薬学部助手
昭和59年 4月	相模中央化学研究所研究員補
平成 2年 8月	北海道大学薬学部教務技官
平成 9年 3月	北海道大学薬学部助手
平成10年 6月	北海道大学大学院薬学研究科助手
平成10年 7月	北海道大学大学院薬学研究科助教授
平成10年11月	株式会社広栄科学工業研究所主席研究員
平成17年 5月	株式会社広栄科学工業研究所部長
平成18年 6月	株式会社広栄科学工業研究開発本部研究所長
平成19年 6月	株式会社広栄科学工業理事・研究開発本部研究所長
平成23年 4月	株式会社広栄科学工業執行役員・研究開発本部研究所長
平成26年 4月	北海道大学触媒化学研究センター教授
平成27年10月	北海道大学触媒科学研究所教授

触媒科学研究所教授

おおたに ふんしょう
大谷 文章 氏



この原稿の作成依頼をうけて、冊子体の「北大時報」が配られなくなってからはじめて電子版「北大時報」を読みました。昨年度で退職された先生方の「定年を迎えるにあたって」は、みなさんの北大に対する「思い」が詰まっていました。さて、わたしはどんな「思い」をもっているのだろうか、ふりかえてみました。

1996年に理学研究科の助教授として赴任し、1998年に触媒化学研究センターに研究室をもって以来、ずいぶんとすき勝手なことをしてきました。これをお許しいただいたことに感謝します。すき勝手といえば、委員会や会議、教授会で、大勢とは逆の意見を主張して長引かせることばかりでした。こんなことになったのは、生来の「あまのじゃく」な性格によるものですが、その結果、旧来のやり方を見直していただいたことも少なからずあったと自負しております。おなじような「あまのじゃく」な人ばかりだった前任地とくらべれば、北大の「あまのじゃく」は稀少だったように思います。全学教育の講義で、「科学をやるには『あまのじゃく』になることも必要かも」と言ったら、受講生から「はい、『あまのじゃく』になります」の感想がくるくらい素直な学風の北大にも、「あまのじゃく」な人が絶えないことをひそかに願っております。

略 歴

生 年 月 日	昭和31年11月30日
昭和54年 3月	京都大学工学部石油化学科卒業
昭和56年 3月	京都大学大学院工学研究科修士課程修了
昭和59年 3月	京都大学大学院工学研究科博士後期課程単位修得退学
昭和59年 4月	京都大学工学部研究生
昭和60年 2月	} 京都大学工学部助手
平成 8年 3月	
昭和60年 3月	工学博士（京都大学）
平成 8年 4月	北海道大学大学院理学研究科助教授
平成10年 9月	北海道大学触媒化学研究センター教授
平成27年10月	北海道大学触媒科学研究所教授

情報基盤センター教授

みずた まさひろ
水田 正弘 氏



大学入学以降、北海道大学にお世話になりました。北大時報でご挨拶できる日を楽しみにしておりました。高校生のころから、数学に興味があり、北大理類を受験・合格し、教養部から数学科に移行することができました。数学だけ勉強すればいいとの環境は最高であり、毎日、午前の授業開始2時間前から登校しておりました。面白い試験もありました。持ち込み可、相談可、出入り自由で、「この問題解けるものなら解いてみろ」のような問題をやらされました。当時、パーソナルコンピュータの創成期で情報に興味を持ち、大学院しかなかった情報工学専攻に進学しました。そこでは、コンピュータとともに多変量解析・統計学を研究する自由な時間がありました。

略歴にあるように、文学部、教養部、工学部などで職を得ることができました。教育面では、統計学の授業について5回エクセレント・ティーチャーズに選出されました。統計学は、「科学の文法」と呼ばれて研究の道具としての認識はされていたと思いますが、我国は統計学部のない稀有な国でありました。ここ数年、ビッグデータ・第3次AIブーム・データサイエンスの流れにより、（東京より東側の動きは遅いのですが）それも解消されつつあります。北大で、よりよい教育・研究成果を上げる基本学問としての情報科学や統計学と出会えたことに感謝します。

略 歴

生 年 月 日	昭和31年10月11日
昭和54年 3 月	北海道大学理学部卒業
昭和56年 3 月	北海道大学大学院工学研究科情報工学専攻修士課程修了
昭和59年 3 月	北海道大学大学院工学研究科情報工学専攻博士後期課程単位修得退学
昭和61年 3 月	工学博士（北海道大学）
昭和59年 6 月	北海道大学文学部助手
昭和62年10月	北海道大学工学部講師
昭和63年 4 月	北海道大学工学部助教授
平成 9 年 4 月	北海道大学大学院工学研究科助教授
平成11年 4 月	北海道大学情報メディア教育研究総合センター教授
平成15年 4 月	北海道大学情報基盤センター教授
平成23年 4 月	情報基盤センター副センター長
平成25年 3 月	

北方生物圏フィールド科学センター教授

やまだ としひこ
山田 敏彦 氏



農水省系研究機関から北大に赴任した当時は、世界的にバイオ燃料に関する研究が大きく注目された頃でした。日本各地の野山には、ススキやオギといったススキ属植物が自生しています。ススキとオギとの雑種であるジャイアントミスカンサスは、バイオマス生産性が高く、持続的な生産が可能であるとともに土壌への炭素貯留機能が高いために、欧米ではそのバイオマス利用が、いち早く注目されました。

2007年、石油メジャーBPが10年間500億ドルでEnergy Bioscience Institute(EBI)をカリフォルニア大学バークレー校とイリノイ大学に設立しました。日本はススキ属植物の遺伝資源の宝庫で、熊本県阿蘇地方ではススキ草地在有史以来長年利用され炭素貯留に関する研究には格好な研究フィールドでした。そのため、EBIの潤沢な研究資金を受け、ススキのバイオマス研究を本格的に着手しました。その後、イリノイ大学を代表研究機関としたススキ属ゲノム科学に関する研究に関して米国エネルギー省から計3課題が採択され、国際共同研究を十分に展開できました。

これらの研究を含め、充実した研究生生活を送らせていただくことができ、関係各位には感謝を申し上げます。

略 歴

生 年 月 日	昭和31年 9 月 5 日
昭和54年 3 月	岐阜大学農学部卒業
昭和56年 3 月	岐阜大学大学院農学研究科修士課程修了
平成 2 年10月	農学博士（東北大学）
昭和56年 4 月	農林水産省東北農業試験場研究員
平成 4 年 4 月	山梨県酪農試験場技術員（農林水産省牧草育種指定試験地主任）
平成11年 4 月	農林水産省北海道農業試験場研究室長
平成13年 4 月	独立行政法人農業技術研究機構北海道農業研究センター研究室長
平成17年 4 月	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター教授
平成26年 4 月	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター副センター長

高等教育推進機構（理学院自然科学
専攻科学コミュニケーション講座）教授

ほそかわ としゆき
細川 敏幸 氏



医学部助手に採用されて以来、5年間の留学を含め40年にわたる研究生生活を北海道大学で過ごすことができました。最大の幸せは、優秀な指導者に出会えたことでした。本学では斎藤和雄先生（元医学部長）、小島豊先生（元環境科学研究科長）、阿部和厚先生、小笠原正明先生、安藤厚先生（以上 元高等教育開発研究部門長）、留学先では共焦点顕微鏡を開発されたAlan Fine先生（ダルハウジー大学教授）、長期増強（記憶の生理学的現象:LTP）を発見されたTimothy V.P. Bliss先生（元英国国立医学研究所研究部長、2016年 Brain Prize受賞）にお世話になりました。

斎藤先生の元では、新しい疲労判定装置VRTとポケットフリッカーを開発しました。Fine先生、Bliss先生の元では、世界で初めて、生きている神経細胞が長期増強の際に見せる形態変化を捉えることに成功しました。高等教育開発研究部において基礎を作った教員研修（FD）は高等教育研修センターに、教学IRは総合IR室に結実しました。IRでは大学IRコンソーシアムを設立することができました。大学評価組織を大学の共同体として作ったことは、日本の教育史に残る出来事です。これらの実務に平行して、研究者としても論文、著書をたくさん発表することができました。

香川のため池や山に囲まれた田舎で遊んでいた少年時代からは、想像もできないような人生でした。本学の同僚、事務職員、学生の皆さんに助けられて退職まで過ごすことができました。皆様、ありがとうございました。我々の作ってきたFDやIRによる教員サポート組織がこれからも皆様の役に立ち、本学がより一層の発展をするよう願ってやみません。

略 歴

生 年 月 日	昭和31年12月10日
昭和55年 3 月	北海道大学理学部物理学科 卒業
昭和57年 3 月	北海道大学大学院環境科学研究科修士課程 修了
昭和57年 4 月	北海道大学医学部助手
平成元年 9 月	医学博士（北海道大学）
平成 2 年 8 月	カナダ ダルハウジー大学医学部客員研究員
平成 6 年 9 月	英国国立医学研究所客員研究員
平成 7 年 5 月	高等教育機能開発総合センター高等教育開発研究部 助教授（大学院医学研究科助教授を兼任）
平成18年 7 月	同 教授
平成20年 4 月	理学院自然科学専攻教授を兼任
平成22年 4 月	高等教育開発研究部研究部 部長
平成22年10月	改組により高等教育推進機構高等教育研究部 高等教育開発研究部門 教授、部門長
平成25年 4 月	IRネットワーク推進室 室長
平成27年 4 月	高等教育研修センター IS部門長、高等教育 研修センター 副センター長、FD部門長
平成29年 4 月	高等教育推進機構副機構長、高等教育研究部長
平成29年 7 月	総合IR室教学部門長

理学研究院准教授

フォルトゥナート マルティン マリア ヘレナ
FORTUNATO MARTINS MARIA HELENA 氏



定年退職は、一定の年齢に達したことで起こる、避けることができない人生の変化のひとつに過ぎません。私は、好きなことをやめる時期を年齢で決めるべきではないと思っています。もちろん若い人たちに道を譲り、夢を実現させ、キャリアを積む機会を与えること必要でしょう。しかしこのことは、上司と部下の関係ではなく、同僚として、またメンターとして、社会の発展に貢献するという同じ目標に向かって、世代の枠にとらわれず一緒に行うことができるのではないのでしょうか。

定年制を一律に導入するのではなく、希望する人、能力のある人には、働き続ける自由を与える。それは社会と個人の双方に利益をもたらすのではないのでしょうか？

私は3年ほど前から、人生の新たなステージを迎えるための計画を立て始めました。自分が最も好きなこと、つまり若い人たちと共に学び働き、彼らが能力を伸ばし、未来に向かって羽ばたくサポートするような活動を続けていくつもりです。私にとって退職は、よく言われるような「引退」ではありません。今までの働き方を変え、自分が心地よく感じる場所で、今後も活動をしていくつもりです。これまで携わった講義のいくつかを継続しながら、新しい講義も開始したいと思っています。また、科学の世界での新しいコラボレーションを開始し、新しい共同教育プログラムにも貢献したいと考えています。

最後になりますが、退職後は以前から行きたかった場所へ旅をしたいと考えています。また、これまで取り組むことができなかった日本語学習を開始したいとも思っています。間違った日本語を話すことを恐れず、挑戦していきます。どうか皆さん応援してください。

略 歴

生 年 月 日	昭和31年 4 月 1 日
昭和58年 6 月	シンフェロポリ大学無脊椎動物学科卒業
昭和62年 7 月	モスクワ大学大学院生物学科修了
昭和62年 7 月	Ph.D.（モスクワ大学）
昭和63年 1 月	スミソニアン熱帯研究所研究員
平成18年10月	クリスティアンアルブレヒト大学客員教授および客員研究員
平成23年12月	北海道大学理学研究院特任准教授
平成26年 4 月	北海道大学理学研究院准教授

保健科学研究院准教授

まさうじ のぶ お
政氏 伸夫 氏



平成23年4月に、保健科学研究院 病態解析学分野に准教授として入職いたしました。図らずも11年間にわたり、奉職できましたこと、大変うれしく存じます。北海道大学のますますのご発展を祈念申し上げます。

略 歴

生 年 月 日 昭和31年12月6日
昭和56年3月 東北大学工学部通信工学科卒業
平成元年3月 北海道大学医学部医学科卒業
平成元年6月 } 医療法人鉄蕉会 亀田総合病院 臨床研修医
平成3年5月 }
平成3年6月 } 社会医療法人北楡会 札幌北楡病院 内科医師
平成9年3月 }
平成8年9月 北海道大学大学院医学研究科博士課程修了
平成8年9月 博士(医学)(北海道大学)
平成9年4月 北海道大学医学部附属病院 第3内科 医員
平成9年5月 北海道大学医学部医学科内科学第3講座 助手
平成10年4月 } 市立函館病院 内科(血液科, 内分泌・代謝科)科長
平成20年3月 }
平成12年10月 } 市立函館病院 輸血管理センター センター長
平成20年3月 }
平成20年4月 } 市立函館病院 輸血・細胞治療センター センター長
平成22年3月 }
平成22年4月 } 北海道医療大学 非常勤講師
平成23年3月 }
平成23年4月 } 北海道大学大学院保健科学研究院准教授
令和4年3月 }
令和3年10月 } 東北大学大学院医工学研究科 非常勤講師(客員教授)
令和4年3月 }
令和4年4月 東北大学大学院医工学研究科 非常勤講師(客員教授)

工学研究院准教授

ひぐち みき お
樋口 幹雄 氏



約6年の民間企業時代を除いて学生時代から現在まで通算39年間、北大にお世話になりました。私の時代はまだ理類という大きな枠での入試がおこなわれていて、システム的には現在の総合入試と共通する部分は多くありますが、学生の気質は大きく変化したと感じます。現代の学生は平均的に真面目で、テストなどはそつなくこなすのですが、いい意味で馬鹿なことに真剣に取り組むことが少なくなっているように思います。こういうふうに感じるのは多分に自身が老化したせいかもしれませんが。

研究面では、民間企業の時代から一貫して酸化物単結晶材料に携わってきました。単結晶は、「その作り方を知っている」ということと「実際にそれを作る」ということの乖離が最も大きい材料のひとつですが、学生たちは皆、自分たちなりのノウハウを駆使して、私の無理難題に応えてきてくれました。感謝の念に堪えません。

札幌の中心にありながら今なお素晴らしい環境が残っている北大で教育・研究に携わってこれたことを誇りに思います。北大のさらなる発展を祈念いたします。

略 歴

生 年 月 日 昭和33年9月11日
昭和56年3月 北海道大学工学部卒業
昭和56年3月 } 民間(秩父セメント株式会社)
昭和61年12月 }
昭和62年1月 北海道大学工学部助手
平成6年12月 博士(工学)(北海道大学)
平成9年4月 北海道大学大学院工学研究科助手
平成19年4月 北海道大学大学院工学研究科助教
平成20年4月 北海道大学大学院工学研究科准教授
平成22年4月 北海道大学大学院工学研究院准教授

工学研究院准教授

おいかわ しゅんいち
及川 俊一 氏



昭和57年（1982年）に北海道大学工学部助手となつてから、ほぼ40年間の長きにわたつて教育・研究に携わってきました。卒業論文は核融合の40ページほどの英文の理論解析論文の翻訳と式の導出（主に変分計算）でしたが、卒業式のある3月には卒論とは無関係の数値計算結果を電気学会の全国大会で発表させられ、かなりバタバタした時期を過ごしたのは、今となつては楽しい思い出です。

ときは細川政権が誕生したころ、弱電離プラズマを作動流体とするMHD発電機に関する私の学位論文は、論文博士の公開論文説明会を残すのみとなつていた時期に長期出張で渡米し、1年半ほど気楽な研究生活を送っていました。そのため、そのころ日本で起こっていた1993年コメ騒動、村山政権樹立、阪神淡路大震災の惨劇は、テネシー州の田舎町のケーブルテレビと研究室の同僚や指導学生との電子メールで情報収集していたことも、良くも悪くも在任中の強烈な思い出の一つです。

帰国後は再び核融合の数値解析および理論解析の研究に戻り現在に至っています。

4月からも特任教員としてお世話になります。

略 歴

生 年 月 日	昭和33年 6 月 7 日
昭和57年 3 月	北海道大学工学部卒業
昭和57年 5 月	北海道大学大学院工学研究科電気工学専攻修士課程退学
昭和57年 6 月	北海道大学工学部助手
平成 6 年 3 月	博士（工学）（北海道大学）
平成 8 年 4 月	北海道大学工学部助教授
平成 9 年 4 月	北海道大学大学院工学研究科助教授
平成19年 4 月	北海道大学大学院工学研究科准教授
平成22年 4 月	北海道大学大学院工学研究院准教授

工学研究院准教授

えら た とも き
恵良田 知樹 氏



昭和50年に北大に入学し、卒業後は筑波大学大学院に進み、一旦企業に就職したものの、その後また筑波大学の講師として採用されましたが、さらに平成6年に母校である北海道大学へと戻り、まさに大きなUターンという感じの人生でした。学生当時より扱う対象物が磁性体であったり、低次元導体であったり、そしてセルロースといった、一見とりとめのない研究をしてまいりましたが、これらの研究を「NMR（核磁気共鳴法）という手段を用いて」という点が一貫して共通しておりました。この素晴らしい測定法に大学院時代に出会ったことと、さらに北海道大学で出会った綿や紙として人類が太古の昔より接してきた親しみのある「セルロース」という物質。この二つは研究すればするほど、その奥深さが大きくなるような、研究を生業とする人間にとってつくづく魅力的な手段と物質で、研究者として幸福な時間を過ごすことが出来ました。

最後になりますが、これまで支えて下さった諸先生・同僚・事務の方々そして本当に素晴らしい学生諸君に心よりお礼申し上げますとともに、我が北大が益々発展することをお祈り申し上げます。

略 歴

生 年 月 日	昭和31年11月26日
昭和54年 3 月	北海道大学理学部卒業
昭和56年 3 月	筑波大学大学院修士課程修了
昭和59年 3 月	筑波大学大学院博士課程修了
昭和59年 3 月	理学博士（筑波大学）
昭和59年 4 月	民間（日本ブルカー株式会社）
昭和63年 9 月	
昭和63年10月	筑波大学物理学系講師
平成 6 年 4 月	北海道大学工学部助教授
平成 9 年 4 月	北海道大学大学院工学研究科助教授
平成19年 4 月	北海道大学大学院工学研究科准教授
平成22年 4 月	北海道大学大学院工学研究院准教授

医学研究院准教授

いわなが
岩永 ひろみ 氏



平成5年に本学獣医学部に赴任した夫と同居するため札幌の仕事を探していましたが、その3年後、当時医学部解剖学教授であられた児玉譲次・阿部和厚両先生のご高配で助手の職を得て、組織学授業と顕微鏡実習標本作成に携わって参りました。前任地では講師として学部学生・大学院生の教育を担当し、正直これがなければ楽かと思うこともありましたが、こちらに来て負担がなくなると初めは拍子抜けでした。たまに阿部先生の代講をさせていただくと、私の張り切りようが面白めずらしいのか、学生さんに『先生、次の講義は何時するの?』とよく聞かれました。この言葉に励まされ、准教授昇任後も自分の講義を待つかもしれない方々のため、授業の準備に最大限の努力を払ったつもりです。研究面では、北海道大学は夢の場所でした。とくに、医学部中央研究部の電顕室に足繁く通い、室の中村秀樹先生に大変お世話になりました。なかでも、腸の基底膜から顔を出す上皮内リンパ球の走査電顕像と遺伝子操作した膵腺房細胞に充満する分泌顆粒の透過電顕像がああScience誌に掲載されたのは楽しい思い出です。再雇用であと2年お世話になりますが、皆様よろしく願いいたします。

略 歴

生 年 月 日 昭和33年11月8日
昭和58年3月 弘前大学医学部医学科卒業
昭和62年3月 新潟大学大学院医学研究科博士課程修了
昭和62年3月 医学博士（新潟大学）
昭和62年4月 新潟大学医学部助手
平成5年12月 新潟大学医学部講師
平成8年6月 北海道大学医学部助手
平成17年12月 北海道大学大学院医学研究科助教授
平成19年4月 北海道大学大学院医学研究科准教授

北海道大学病院准教授

いしかわ まこと
石川 誠 氏



1975年に北大入学、1981年に歯学部卒業後、口腔外科学第一講座（富田喜内教授）の大学院に籍を置かせていただき、4年余を小林博教授の下で北大医学部癌研究施設病理部門（現北大遺伝子病制御研究所）にて、次いで2年余をDr. R.S.Kerbelの下でトロントのマウントサイナイホスピタル研究所にて癌の転移に関する基礎研究に没頭いたしました。1987年に帰国してからの約35年間は歯学部／北大病院に籍を置き、口腔外科と口腔インプラントの治療・教育に携わらせていただきました。また、2006年から2014年までの8年間は北大病院医療安全管理部にも籍を置き、GRM（ゼネラルリスクマネジャー）として医療安全の管理運営を学ぶとともに、特殊な立場から病院の運営を俯瞰できる機会をいただきました。

癌の基礎研究、口腔外科・口腔インプラントの臨床と教育、医療安全から得たものを後進にしっかりと残すことが出来ない自分の非力を恥じるばかりですが、このような私を入学から47年もの間見守ってくれた「北海道大学」に感謝するのみです。今後の北大の益々の発展を祈念いたします。

略 歴

生 年 月 日 昭和32年1月26日
昭和56年3月 北海道大学歯学部卒業
昭和60年6月 北海道大学大学院歯学研究科博士課程修了
昭和60年6月 歯学博士（北海道大学）
昭和60年9月 } Mt. Sinai Hospital Research Institute, Toronto,
昭和62年10月 } Canada Post-doctoral Research Fellow
昭和63年4月 北海道大学歯学部助手
平成15年10月 北海道大学病院講師
平成18年9月 北海道大学病院助教授
平成19年4月 北海道大学病院准教授
平成20年11月 北海道大学病院診療教授
平成18年8月 } 北海道大学病院GRM（ゼネラルリスクマネジャー）
平成26年7月 }

創成研究機構准教授

ゴータム ピタンバル
GAUTAM PITAMBAR 氏



私は国費留学生として1986年から4年間、北海道大学理学部において古地磁気学を学び学位を取得しました。その後Tribhuvan 大学に戻り研究・教育に努めた後、2003年に21世紀COEプログラム「新・自然史科学創成」で職員として採用され、北海道大学での勤務が始まりました。ヒマラヤ及び北海道の地球科学的研究だけではなく自然史科学関連教育並びにCOEプログラム推進室コーディネーターの役割を担うことができました。市民セミナー及び国際学会開催へ貢献し、数多くの教員、研究員、大学院生及び外国人研究者と交流ができたことをうれしく思います。

創成研究機構に異動してからは学際的、分野・部局横断的、若手および産学官連携研究関連研究支援と研究業績分析に集中し計量書誌学的研究に挑戦しました。また、URAステーションと連携しながら、論文名寄せを実施し、分析結果を研究戦略室、総合IR室などと共有しました。戦略室委員会委員として研究業績データの有効活用に向けた機会も誇りに思っています。

今日まで24年以上、緑あふれるキャンパスで充実した日々を送ることができました。長年私を指導してくれた先生方、様々な形式で助言又はサポートを頂いた献身的な教員たち、そして積極的に協力して頂いた事務スタッフに感謝するとともに、北海道大学のますますのご発展をお祈りいたします。

略 歴

生 年 月 日 昭和31年10月
昭和52年 4 月 Tribhuvan大学Trichandra College卒業
昭和58年 6 月 Leningrad Mining Institute応用地球物理学専攻修士課程修了
平成 2 年 3 月 北海道大学大学院理学研究科地質学鉱物学専攻博士後期課程修了
平成 2 年 3 月 理学博士（北海道大学）
昭和58年 7 月 トリブバン大学Assistant Lecturer
昭和61年 1 月 北海道大学大学院理学研究科研究生
平成 2 年 4 月 トリブバン大学 Lecturer
平成15年 9 月 北海道大学大学院理学研究科COE研究員
平成17年 4 月 北海道大学大学院理学研究科特任助教授
平成20年 7 月 創成科学共同研究機構准教授

総務企画部長

かわの こうき
河野 孝紀 氏



昭和55年3月に高校卒業後、4月に北海道大学に採用され、今日まで、採用面接の遅刻で始まり、その後も数々の失敗を繰り返しながらの42年間でしたが、良き上司や同僚の方々の助けや支えにより定年を迎えることになりました。

振り返れば、右も左も分からず北大病院医事課外来係の窓口に立って以来、現職に至るまで、学内では経済学部、水産学部、医学部、総務企画部、学外では文科省、東京医科歯科大学において勤務させて頂いた様々な経験によって、大学職員として、社会人として何とかここまで辿り着くことができました。これも、その時々にご対応、ご指導頂いた先生方、先輩方や同僚等のお陰であり、その出会いは、私の一生の財産であります。

私は北海道大学が大好きです。私のような者を採用して頂いたことはもちろんですが、自然溢れる広大なキャンパス、何があっても倒れず回復するポテンシャル、仲間を大切にするチームワークなど数えればきりがありません。北海道大学は4年後の2026年に創基150周年を迎えることになりますが、それを通過点とし、200年後、250年後も益々発展していくことを、北大のファンの一人として応援していきたいと思っております。皆様、本当に長い間大変お世話になりました。

略 歴

生 年 月 日 昭和36年11月14日
昭和55年 4 月 北海道大学医学部附属病院医事課
平成12年 4 月 東京医科歯科大学人事課係長
平成14年 4 月 北海道大学医学研究科・医学部人事係長
平成17年 4 月 北海道大学総務部人事課係長
平成21年 4 月 北海道大学総務企画部人事課課長補佐
平成26年 4 月 北海道大学総務企画部人事課厚生労務室長
平成28年 4 月 北海道大学総務企画部情報企画課長
平成30年 4 月 北海道大学総務企画部総務課長（兼）安全衛生室長
令和31年 4 月 北海道大学総務企画部次長（兼）総務課長
令和 3 年 4 月 北海道大学総務企画部長

研究推進部長

は せ がわ やすひろ
長谷川 康弘 氏

バブル景気直前の昭和59（1984）年、大手民間企業の新卒大量採用を横目に、縁あって北海道大学にお世話になりました。あれから38年、そのうち34年は北海道大学で、また、結果としてその殆どを正門そばの建物で過ごすこととなりました。

採用日の懇親会で、ある先輩に言われた言葉、「いいか、これから毎月給与をもらう。その時に「自分は今月この額以上頑張ったな！」と思えるような仕事をしろ。そうすればきっとよい仕事ができる。」当時まだ真正直だった私はこの言葉を胸に自分なりに悪戦苦闘、七転八倒しながら、気がつけば38年の年月がたちました。昭和感満載の言葉かも知れませんが、私はこの言葉があったからこそ今まで頑張れたと思うとともに、当時、面倒くさいも愛すべき先輩達が大勢いてくれたことに改めて感謝しております。

こうしてなんとか定年を迎えられること、ひとえに尊敬する上司や先輩の方々、何でも気軽に話せる同僚、無理難題を聞いてくれた後輩達、さらには様々な職種の皆様方のご指導、ご支援のおかげです。特に50歳を過ぎてからの10年は様々な職種の方々と多くの企画に関わらせていただきました。とても楽しく充実した日々でした。改めて心より感謝申し上げます。

最後になりますが、北海道大学の益々の発展と皆様のご健勝とご活躍を心からお祈りいたします。長い間、本当にありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日 昭和36年4月
昭和59年4月 北海道大学
平成13年4月 小樽商科大学大会計課司計係長
平成16年4月 北海道大学財務部主計課第一予算掛長
平成17年4月 北海道大学財務部主計課総括予算掛長
平成18年4月 北海道大学財務部主計課予算第一係長
平成19年4月 北海道大学病院経営企画課課長補佐
平成21年4月 北海道大学財務部主計課課長補佐
平成23年4月 北海道大学研究推進部産学連携課長
平成25年4月 北海道大学総務企画部企画課長
平成28年4月 北海道大学総務企画部次長（兼）企画課長
平成30年4月 北海道大学研究推進部長

医学系事務部長

さ と う こう じ
佐藤 浩司 氏

昭和55年4月に採用され、令和4年3月をもって定年退職を迎えることになりました。

この間、大学の法人化、教育研究組織の大学院重点化や学院・研究院化など部局において、また、文部省（現文部科学省）や他大学において貴重な経験をさせていただきました。

改めまして皆さまに感謝並びに御礼申し上げます。

管理職となって印象に残る出来事は、「北海道胆振東部地震に伴う道内全域の停電」、未だ終息が見えない「新型コロナウイルス感染症」がもたらした社会における様々な影響です。仕事と生活における困難さや経験のないことに対する危機管理の重要性を痛感させられました。

令和4年度からは、第4期中期目標期間に入り、寶金総長が示された6つのビジョンに向かって邁進することになると思います。このビジョンを達成するためにも、未来戦略本部DX検討部会（事務業務（働き方）タスクフォース）における事務効率化・働き方改革については、個人的に注目するとともに期待しております。

最後になりますが、長い間お世話になり、ありがとうございました。

北海道大学の益々の発展及び皆さまのご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

略 歴

生 年 月 日 昭和36年6月
昭和55年4月 北海道大学
平成12年4月 室蘭工業大学総務課人事係長
平成15年4月 北海道大学理学研究科・理学部専門職員
平成18年4月 北海道大学総務部人事課給与第一係長
平成19年4月 北海道大学総務部人事課係長
平成21年4月 北海道大学工学系事務部総務課課長補佐
平成23年4月 北海道大学国際本部国際連携課課長補佐
平成26年4月 北海道大学総務企画部総務課課長補佐
平成27年4月 北海道大学医学系事務部総務課長
平成30年4月 北海道大学教育学事務部事務長
令和2年4月 北海道大学医学系事務部長

総務企画部情報企画課長

ねもと つねひで
根本 恒秀 氏



昭和59年に採用された当時は「新人類」と呼ばれ、今では「働かないおじさん」と揶揄されながらも38年間が過ぎました。

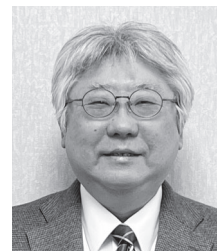
採用された当時はワープロすらなくコピー機も白黒で、連絡を取るにもひたすら電話をかけまくっていた記憶があります。今は一人1台PCが与えられ、コピー機にはスキャン機能までついていて、連絡はチャットでみたい在職場を取りまく環境は大きく変わりました。その中で38年間大過なく働くことができたのはひとえに諸先輩、同僚、後輩の皆さんのおかげとしみじみ感じています。これまで支えてくださった皆様に感謝を申し上げるとともにますますのご活躍を祈念いたします。

略 歴

生 年 月 日	昭和36年
昭和59年 3 月	北海学園大学法学部卒業
昭和59年 4 月	北海道大学
平成13年 4 月	苫小牧工業高等専門学校庶務課専門職員
平成16年 4 月	小樽商科大学総務課人事係長
平成18年 4 月	北海道大学企画部情報システム課情報管理係長
平成19年 4 月	北海道大学企画部情報企画課係長
平成22年 4 月	北海道大学企画部情報企画課課長補佐
平成23年 4 月	北海道大学情報環境推進本部情報推進課課長補佐
平成28年 4 月	北海道大学総務企画部情報企画課課長補佐
令和 2 年 4 月	北海道大学総務企画部情報企画課長

文学事務部事務長

いけだ とおる
池田 徹 氏



平成2年に小金井市の東京学芸大学から実家がある札幌の北海道大学に転任させていただき、途中、帯広畜産大学、北海道教育大学への出向もありましたが、都合32年間にわたり、本学のお世話になりました。

大学職員としては、国立学校特別会計のもとでの会計事務担当職員、帯広畜産大学、国立大学法人化後は教育研究組織の組織整備、北キャンパス及び総合化学院の部局事務、新渡戸カレッジの支援、北海道教育大学入試課長、文学事務部事務長などを経験させていただきました。

その間、印象に残る経験として、国立学校特別会計下では、補正予算の成立が遅れたため支払元受高の不足により給与の口座振込ができず、全額現金支給をするための数億円を目の当たりにしたこと、国立大学法人化直後の北大では、観光創造専攻設置の際にJR東日本本社で、寄附講座設置を願うプレゼンテーションを行ったこと、また、新渡戸カレッジの運営支援では、国際社会で活躍する本学同窓生からなる多数のフェローに接し、その経験からなる人生哲学や様々な大学への期待を直に聞くことができたこと、文学事務部では、部局事務の総括として実務を俯瞰した結果、あらためて職員の優秀さに気づいたことがあげられます。

このように充実した大学職員生活を送ることができたのは、諸先生・先輩・同僚・後輩と共有できた時間のなかで、感じたこと、考えさせられたことが自身の糧となり、日々の経験が自身の観念を塗り替えていくことで、実現できたことであると思っています。

今、多様性や様々な価値観が存在する社会で、それらの現実を垣間見ることができた北大での経験を振り返ることにより、今後の人生を歩んでいきたいと思っています。

長い間本当にありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日	昭和37年 1 月 5 日
昭和59年10月	東京学芸大学
昭和61年10月	放送教育開発センター
平成元年 4 月	東京学芸大学
平成 2 年10月	北海道大学
平成13年 4 月	帯広畜産大学会計課司計係長
平成16年 4 月	帯広畜産大学企画総務部財務課財務企画係長
平成16年 7 月	北海道大学企画部企画調整課組織整備係長
平成19年 7 月	北海道大学企画部企画調整課係長
平成21年 4 月	北海道大学企画部企画調整課課長補佐
平成23年 4 月	北海道大学北キャンパス合同事務部事務長補佐
平成24年 4 月	北海道大学工学系事務部総務課課長補佐
平成26年 4 月	北海道大学学務部教育推進課課長補佐
平成28年 4 月	北海道大学学務部学務企画課課長補佐
平成29年 4 月	北海道教育大学学務部入試課長
令和 2 年 4 月	北海道大学文学事務部事務長

医学系事務部会計課長

いわまつ しょういち
岩松 正一 氏

定年退職は自分にとって、まだまだ先のことと思ひ勤務してまいりましたが、自分が迎えることになり、年月の経過の早さを感じております。

振り返って見ますと、昭和55年4月に本学医学部附属病院医事課入院患者掛に採用になって以来、旭川、室蘭を含め42年間いろいろな仕事を経験させていただきました。それぞれの職場での懐かしい思い出が甦ってまいります。

何とか無事に節目を迎えられたのも、その時々でいただきました、多くの方々からのご指導とご支援があつてのことで、心から感謝を申し上げる次第です。

4月から引き続き再雇用で働き続けることを考えると実感がわかりませんが、嘱託職員として今後も微力ながら貢献してまいりたいと思います。

最後になりますが、北海道大学の益々の発展を祈念いたしますとともに、皆様方のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

略 歴

生 年 月 日	昭和36年4月28日
昭和55年4月	北海道大学
平成13年4月	旭川医科大学会計課給与経理係長
平成14年4月	旭川医科大学会計課照査係長
平成15年4月	旭川医科大学会計課専門職員（医療材料担当）
平成16年4月	北海道大学監査室専門職員
平成17年4月	北海道大学監査室監査係長
平成19年4月	北海道大学総務部人事課係長（給与支給担当）
平成21年4月	北海道大学病院管理課係長（管理担当）
平成23年4月	北海道大学施設部施設企画課課長補佐
平成26年7月	北海道大学工学系事務部経理課課長補佐
平成29年7月	北海道大学学務部学務企画課課長補佐
平成30年4月	室蘭工業大学経理課長
令和2年4月	北海道大学医学系事務部会計課長

医学系事務部保健科学研究院事務課長

さとう よういち
佐藤 陽一 氏

昭和60年4月採用以来、2機関、3度の出向約10年を除き、約27年この美しい札幌キャンパスに勤務させていただきました。

在職中は、特に希望した訳ではありませんが、一貫して総務・人事系の業務に従事させていただきました。

そのため、大学職員でありながら、放送大学出向中の社会人学生対応を除き、教務系業務の経験はなく、9年勤務した病院でも、患者さん対応業務の経験もありませんでしたが、小樽商科大学出向中の法人化対応（就業規則等作成）、病院での無認可保育施設「保育園ポプラ」の設置等、やりがいのある業務を沢山経験させていただきました。

今振り返ってみると、信頼・尊敬できる上司、苦勞を共にした同僚、優秀な後輩に支えられて無事定年を迎えられることは本当に幸せなことであり、また、仕事を通じて生涯をともにできる友人を得ることができたことは私にとって大きな宝物です。

4月以降も再雇用職員としてしばらくお世話になります。が、定年という一区切りを迎えるにあたり、公私ともにお世話になった多くの同僚、後輩職員に感謝申し上げますとともに、益々のご活躍を祈念し、挨拶とさせていただきます。

長年にわたり、ありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日	昭和36年5月15日生
昭和59年3月	北海学園大学法学部卒業
昭和60年4月	北海道大学
平成12年9月	小樽商科大学庶務課人事係長
平成13年4月	同 総務課人事係長
平成16年4月	北海道大学病院総務課労務管理掛長
平成20年4月	同 医学系事務部総務課係長
平成22年4月	放送大学学園北海道学習センター事務長
平成25年4月	北海道大学病院総務課課長補佐
平成28年4月	小樽商科大学総務課長
令和2年4月	北海道大学医学系事務部保健科学研究院事務課長

薬学事務部事務長

や ま き ま さ ひ こ
八巻 雅彦 氏



私の最初の就職は、日本国有鉄道中越駅の駅員として、貨車の連結や改札業務等に加え、国鉄分割・民営化反対のデモ・座り込みもしておりましたが、人生とはわからないもので、この度、薬学部で無事定年を迎えることができました。

北海道大学での思い出としては、中川地方演習林において、カヌークラブ「山火事注意」を結成し、天塩川水系の水質および魚類生態調査を行い、水産学部においても引き続き海洋魚類調査に従事してきました。

しかし、そんな充実した日々はいつまでも続くはずもなく、研究協力課では、長時間労働と管理職からの熱い指導を経験しました。この時期を一緒に過ごした職場の仲間には深い感謝と敬意を表します。

また、施設関係業務も多く経験し、獣医学部ではゼンビア大学にP3ラボ設置とCLUB獣医を開設し、工学部ではフロンティア応用科学研究棟（鈴木彰記念館）建設。医学部では、百年年記念館の建設にたずさわる事が出来ました。時代は新型コロナウイルスの流行、ロシア軍のウクライナ侵攻と混迷を極めていますが、北大の皆さまには「和顔愛語」を身上としていただければ幸いです。

最後に美しい北海道大学が益々発展することを心から祈っております。

長い間お世話になり本当にありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日 昭和36年 5月31日
昭和55年 5月 日本国有鉄道旭川鉄道管理局
平成 2年 4月 北海道大学農学部附属演習林中川地方演習林
平成13年 4月 北海道大水産科学研究科・水産学部専門職員
平成15年 4月 北海道大水産科学研究科・水産学部用度掛長
平成16年 4月 北海道大学術国際部研究協力課研究助成掛長
平成19年 4月 北海道大学獣医学研究科・獣医学部係長
平成23年 4月 北海道大学工学系事務部経理課課長補佐
平成26年 7月 北海道大学医学系事務部会計課課長補佐
平成28年 7月 室蘭工業大学経理課長
平成30年 4月 北海道大学医学系事務部会計課長
令和 2年 4月 北海道大学薬学事務部事務長

獣医学系事務部事務長

いのう え な お き
井上 直樹 氏



国鉄の分割・民営化のうちに北海道大学に採用いただいてから34年、この3月をもって定年を迎えることになりました。

国鉄から大学という全く異なる環境になりましたが、諸先輩・同僚からの温かいご支援・ご指導の下、職場にも職務にも慣れることができました。

この広大な札幌キャンパス以外では、農学部附属演習林苫小牧地方演習林（現北方生物圏フィールド科学センター）および旭川医科大学で勤務いたしました。それらも大きな経験・財産となりました。また、「野球（全北大）」「歌留多」「雪合戦」などに誘っていただき、仕事以外においても充実した日々を過ごす間に人として成長できたと感じております。

まだまだ沢山の想いはありますが、これまで私にご支援・ご指導くださいました多くの方々に感謝を申し上げるとともに、北海道大学の更なる発展と皆様のご健勝・ご活躍をお祈り申し上げ、最後の挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日 昭和36年 7月19日
昭和63年 6月 北海道大学
平成14年 4月 旭川医科大学総務部会計課専門職員
平成15年 4月 旭川医科大学総務部会計課司計係長
平成16年 4月 旭川医科大学総務部会計課財務企画係長
平成17年10月 北海道大学学術国際部研究協力課産学連携係長
平成19年 4月 北海道大学学術国際部研究協力課係長（産学連携担当）
平成19年 7月 北海道大学学術国際部研究協力課係長（競争的資金担当）
平成20年 4月 北海道大学病院経営企画課課長補佐
平成22年 4月 北海道大学学術国際部研究協力課課長補佐
平成22年 7月 北海道大学学術部研究協力課課長補佐
平成23年 4月 北海道大学研究推進部研究企画・推進課課長補佐
平成24年 4月 北海道大学研究推進部研究振興企画課課長補佐
平成25年 4月 北海道大学研究推進部産学連携課長
平成27年 4月 北海道大学医学系事務部保健科学研究院事務課長
平成29年 4月 北海道大学獣医学系事務部事務長

北海道大学病院管理課長

いし い すすむ
石井 進 氏



昭和55年、地方からの夜行列車に揺られて、札幌での公務員生活が始まりました。この年、初めて北大構内に入ることになるのですが、林の中のラグビー場がわからず、学生に助けてもらったのが、北海道大学での最初の出来事です。

昭和62年11月、北海道大学に採用になり、思い出深い勤務地は、家族で異動した雨龍地方演習林です。幼稚園の転園、星の降る母子里、釣り、スキー、ぼっとな（汲み取り式）トイレなど家族全員が貴重な3年間となっています。病院勤務が長く、新型コロナウイルス感染症が収束されないのが、非常に残念です。

最後になりますが、北海道大学キャンパスの四季折々の美しさの中で、定年まで勤めることができましたのは、上司、先輩、同僚そして後輩にも恵まれ、様々な職種の皆様に支えられたおかげと、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日	昭和36年 4 月 6 日生
昭和62年11月	北海道大学
平成14年 4 月	北海道大学歯学研究科・歯学部業務課医事掛長
平成17年 4 月	北海道大学病院医事課包括審査係長
平成18年 4 月	北海道大学病院医事課医事係長
平成21年 4 月	北海道大学病院医事課課長補佐
平成25年 4 月	北海道大学病院医事課医療支援室長
平成29年 4 月	北海道大学病院管理課長

北海道大学病院経営企画課長

み う ら じゅんいち
三浦 順一 氏



昭和61年 8 月に本学病院医事課に採用され、本年 3 月で定年退職を迎えることとなりました。

無事に迎えることができましたことは、多くの上司、先輩、同僚、後輩の皆様、さらに関係いたしました教職員の皆様の暖かいご指導のお陰であると心から感謝申し上げます。

採用から35年間、そのうち病院勤務が約27年間で病院事務部全課に在籍し、病院特有の業務なども楽しく勤務することができました。

中でも平成23年に起きた東日本大震災では、医師・看護師・薬剤師・事務から構成された「北海道大学病院災害医療支援チーム」が10班編成され、岩手県陸前高田市へ第3班として勤務させていただくなど、貴重な経験をさせていただきました。

また、平成30年に発生した北海道胆振東部地震でも鶴川へ災害医療支援チームの一員として貴重な経験をさせていただきました。

現在病院では、新たな病院再開発整備事業についての検討を進めておりますが、北海道大学が今後益々発展されることを祈念いたしますとともに、皆様方のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

長い間、お世話になり、本当にありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日	昭和36年 6 月 3 日生
昭和61年 8 月	北海道大学
平成13年 4 月	旭川工業高等専門学校会計課総務係長
平成16年10月	北海道大学病院医療支援課医療支援係長
平成17年10月	北海道大学病院経営企画課経営企画係長
平成19年 4 月	北海道大学病院経営企画課係長
平成20年 4 月	北海道大学病院総務課係長
平成21年 7 月	北海道大学病院医事課医療支援室室長補佐
平成24年 4 月	北海道大学病院経営企画課課長補佐
平成29年 4 月	北海道大学病院医療支援課長
平成31年 4 月	北海道大学病院経営企画課長

北海道大学病院看護部長

たかはし くみ こ
高橋 久美子 氏



看護学校から始まり北海道大学には大変お世話になりました。長いようであつという間だった気がします。在職中病棟は2部署、中央部門も2部署、最後看護部と様々な経験をさせていただきました。当院でしかできない最先端の治療に携わることもあり、開始するために何も無いところから準備し、実施・定着継続という取り組みも経験させていただきました。その中で、患者さんが望む生活に戻れるように共に歩んだ経験は、自分自身の成長する機会にもなり、出会った患者さんたちにも大変感謝しております。

この2年間は新型コロナウイルス感染症対応に病院が丸になって戦ってきました。その中で、職員の皆様とは経験したことのない体験を共有し、お互いを思いやり支えあいながら、様々な困難を乗り越えてきました。どの立場の方も「今の自分で何ができるか」をずっと悩み、考え実践してきたと思います。この経験が皆様の今後に役立つことを願っています。

最後になりますが、北海道大学のますますの発展と、今後起こりうる様々な困難をプラスに変えていく力を発揮されることを心から願っています。

長い間お世話になり、本当にありがとうございました。

略 歴

生 年 月 日	昭和37年 2月23日
昭和58年 3月	北海道大学医学部附属看護学校卒業
昭和58年 4月	北海道大学医学部附属病院看護部
平成 4年 4月	北海道大学医学部附属病院看護部副看護婦長
平成16年 4月	北海道大学病院看護部看護師長
平成24年 4月	北海道大学病院看護部副看護部長
平成31年 4月	北海道大学病院看護部看護部長

■ 諸会議の開催状況

役員会（令和4年2月7日）

- 議 案・令和5年度概算要求の基本方針について
- ・第4期中期目標期間における基幹経費化予算の配分方針について
 - ・大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所との連携協力協定の締結について
- 協議事項・アイヌ共生推進本部の設置について
- ・育児・介護休業法等改正への対応について
 - ・諸規則の制定及び一部改正について
 - ・就業規則関連規程の一部改正について
- 報告事項・理事及び副学長の任命について
- ・総長補佐の任命について
 - ・令和4年度客観・共通指標による評価結果及び運営費交付金等（予定額）について
-

教育研究評議会（令和4年2月16日）

- 議 題・経営協議会の学外委員について
- ・フィリピン宇宙庁との連携協定の締結について
 - ・産学・地域協働推進機構の改組について
 - ・アイヌ共生推進本部の設置について
 - ・諸規則の制定及び一部改正について
- 報告事項・理事及び副学長の任命について
- ・総長補佐の任命について
 - ・令和4年度客観・共通指標等による評価結果及び運営費交付金等（予定額）について
 - ・令和5年度概算要求の基本方針について
 - ・産業創出講座等の設置（更新）について
 - ・全学運用教員の措置について
-

役員会（令和4年2月21日）

- 議 案・フィリピン宇宙庁との連携協定の締結について
- ・産学・地域協働推進機構の改組について
 - ・アイヌ共生推進本部の設置について
 - ・諸規則の制定及び一部改正について
 - ・諸規則の一部改正について
 - ・本学の運営組織の類型整理について
-

※規程の制定、改廃については、「学内規程」欄に掲載しています。

■ 学内規程

国立大学法人北海道大学学術コンサルティング規程の一部を改正する規程

(令和4年2月7日海大達第13号)

①学術コンサルティングの実績として、依頼元の大部分が民間企業であること、学術コンサルティングを契機として、共同研究契約に繋がる事例が多いことから、その実態を踏まえて、学術コンサルティングの定義を見直すこと、②学術コンサルティングの実施による部局の事務的及び経費的負担の増加を踏まえ、当該負担の軽減、部局の研究環境の整備等に寄与するため、依頼者が支払う、産学連携推進経費の下限額を見直すことに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

北海道大学病理解剖受託規程等の一部を改正する規程

(令和4年3月1日海大達第14号)

令和2年12月1日付け文部科学省大臣官房長事務連絡「行政手続における書面主義、押印原則、対面主義の見直しについて」を踏まえ、未来戦略本部DX検討部会事務業務タスクフォースにおいて策定した令和3年12月7日付け「事務手続にかかる書面主義及び押印原則の見直しに関する方針」に基づき、押印原則の見直しを行うことに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

国立大学法人北海道大学における教員の任期に関する規程の一部を改正する規程

(令和4年3月1日海大達第15号)

令和4年3月1日付けで、人獣共通感染症国際共同研究所に、大学の教員等の任期に関する法律（平成9年法律第82号）第4条第1項第2号に基づき任期を定める助教を置くことに伴い、所要の改正を行ったものです。

■ 表敬訪問

海外

年月日	来 訪 者	来 訪 目 的
4.2.9	駐日ボスニア・ヘルツェゴビナ大使館 Sinisa Berjan 特命全権大使	今後の交流に関する懇談（オンライン）



Sinisa Berjan 駐日ボスニア・ヘルツェゴビナ特命全権大使（左）

(国際部国際連携課)

人事

令和4年3月1日付発令

新 職 名（発令事項）	氏 名	旧 職 名（現職名）
【教授】 大学院理学研究院教授 北海道大学病院教授	岡 本 崇 加 藤 達 哉	大学院理学研究院講師 北海道大学病院講師

新任教授紹介

令和4年3月1日付



理学研究院教授に

おかもと たかし
岡本 崇 氏

物理学部門量子物理学分野

生年月日

昭和48年12月4日

最終学歴

北海道大学大学院理学研究科博士後期課程修了（平成13年3月）

博士（理学）（北海道大学）

専門分野

宇宙物理学



北海道大学病院教授に

かとう たつや
加藤 達哉 氏

呼吸器外科

生年月日

昭和46年5月28日

最終学歴

北海道大学大学院医学研究科外科学博士課程修了（平成17年9月）

博士（医学）（北海道大学）

専門分野

呼吸器外科

訃報

名誉教授 杉村 宏 氏
（享年80歳）



名誉教授 杉村 宏 先生は、令和3年10月29日にご逝去されました。

杉村先生は、昭和15年11月24日に東京都にお生まれになりました。昭和38年3月に日本社会事業大学社会福祉学部を卒業され、同年4月小平市に採

用、小平市在職中は一貫して生活保護ケースワーカーとして社会福祉実践にあたられました。昭和52年2月に北海道大学教育学部講師に採用され、昭和55年3月には助教授、平成3年8月には教授に昇任されました。平成12年4月に法政大学現代福祉学部教授として転出され、平成23年3月まで在任されました。同年4月には法政大学名誉教授となっています。

教育学部在任中は教育計画研究グループ（現教育福祉論）に所属され、貧困問題の研究を基礎に、社会的不利を持つ子ども・家族に対する教育、福祉のあり方について研究を進められ、多くの後進を育てられました。また、日本社会福祉学会理事、貧困研究会会長、公的扶助研究会会長などを歴任さ

れ、平成27年には日本社会福祉学会名誉会員に推挙されました。先生の研究は生活保護ケースワーカーとしての実践経験を基底に据えたもので、「現場」から学び「現場」に返すという研究姿勢を終生貫かれました。杉村先生は日本における公的扶助研究の第一人者として社会福祉学の発展に大きな貢献を残されましたが、あわせてこうした研究姿勢に多くの研究者、実践者が励まされました。

杉村先生の長年にわたるご功績に敬意を表し、多大な貢献にあらためて感謝し、ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（教育学研究院・教育学院・教育学部）

名誉教授 岡澤 養三 氏
（享年100歳）



名誉教授 岡澤養三 先生は、令和4年1月24日にご逝去されました。

岡澤先生は、大正12年7月23日に東京市下谷区（現：東京都台東区）にお生まれになり、昭和23年3月に北海道帝国大学農学部農業生物学科を卒業された後、同年7月北海道大学農学部副手として農業生物学科に採用されまし

た。昭和23年11月文部教官に任命され、昭和24年5月北海道大学農林専門部を兼務、昭和26年3月農学部助手を経て、昭和28年9月同助教授に昇任されました。昭和35年8月アメリカ合衆国コロラド大学に留学され、昭和36年8月帰国後、昭和48年4月教授に昇任され、農業生物学科作物生理学講座担任となりました。教授在任中、昭和56年8月から4年間にわたり農学部附属植物園長を務められた後、昭和62年3月停年退職され、同年4月北海道大学名誉教授の称号を授与されました。

岡澤先生は、戦後のわが国の食糧生産の向上のためにバレイショの生理学的研究を進められ、その発育と塊茎形成との関係を、栄養条件や環境条件あるいは植物生長調節物質との生理学的協働機作として解明し、耕種、貯蔵に数々の新知見をもたらされました。

さらに短日や夜間低温の条件においてバレイショが塊茎形成物質を発現し、地下茎へと情報の伝達を行い、地下茎頂次頂部の細胞分裂と肥大により塊茎形成をみるという、形態生理学的な研究業績により、昭和45年4月に日本作物学会賞を授与されました。

その後、主として北海道の主要畑作物の除草剤や植物生長調節物質の作用機作の解明、植物組織培養技術の進歩発展に寄与され、これらの功績により平成12年11月3日に勲三等旭日中綬章を受賞されました。

岡澤先生の長年にわたるご功績に敬意を表し、多大な貢献に感謝申し上げます。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（農学院・農学研究院・農学部）

編集メモ

- 2月25日（金）、一般選抜（前期日程）個別学力検査等を実施しました。雪に負けず会場入りする受験生たち。入

試シーズン真っ只中の構内は、緊張感に満ちていました。



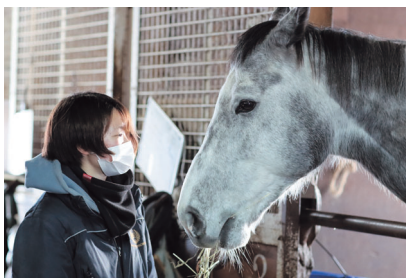
当日の様子



入場する受験生

- 3月2日（水）、本学の馬術部取材しました。馬術部では、2021年の秋の天皇賞に出走したユーキャンスマイル号の全兄（父キングカメハメハ、母ムードインディゴ）の北陽（競走馬名：ノガロ号）をはじめとする13頭がい

ます。一頭一頭の毛並みがつややかで、馬術部員たちが愛情を持って接しているのが一目で感じとれます。馬術の大会は5月頃から始まるそうです。彼らが人馬一体となり、フィールドを駆ける季節まであと少しです。



手入れをする馬術部員の姿



引き馬と呼ばれる場内の運動をするノガロ号

裏表紙メモ

今月のキャンパス風景は第一体育館・第二体育館です。これら体育館は授業や部活動で利用されるほか、札幌キャンパスの卒業式・修了式の会場にもなります。今年度は3月24日に札幌、25日に函館で卒業式・修了式が行われました。色とりどりの晴れ着に身を包み、未来に向かって邁進する卒業生・修了生たち。北大での思い出を胸に、新たな場所で輝いてほしいですね。

キャンパス風景 24 第一体育館・第二体育館（北17条西17丁目）



北大時報 ③ No.816 令和4年3月発行

北海道大学総務企画部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL：(011) 706-2610 / FAX：(011) 706-2092 / E-mail：kouhou@jimuhokudai.ac.jp

北大時報はインターネットでもご覧いただけます。<https://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html>